女流文藝雜誌

ビアトリス

十二月號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

原阿佐緒新著

歌集 白木槿

四六判洋製美本

定價 金八拾五錢

送費八錢

「涙痕」の時代に於ける若き著者は、ひたすら感傷し、ひたすら哀慕し、ひたすら涙に暮れゐたり、時に綺語をさへ弄びてやるせなき若き心の赴くに從ひたり。いま第二集「白木槿」に及びて、著者の歌境は一轉し、著しく現實を直視し、自然に滲到するの傾向を帶び來れり。「白木槿」一卷が女流歌人としての著者をいかなる地位に置くべきかは敢て大方の清鑑に任す。

發行所 東京市日本橋區檜物町九番地 東雲堂書店 振替東京五六一四 電話本局一八七一

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

目次

大杉神近伊藤三氏の自由戀愛事件を論ず

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

純眞なる藝術雜誌

SNAKE

十一月號　要目

定價 金貳拾錢
郵税 金壹錢五厘
大賣捌 東京堂 東京神田表神保町

發行所 潮會
東京麴町上六番町四三
電話番町四二二一番
振替口座三一七二八

ビアトリス

第一巻　第六號



Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大杉神近伊藤三氏の自由戀愛事件を論ず

戀愛の意義

山田わか

私は神近氏の此度の行動を耳にした時別に驚きはしませんでした。あゝ云ふ戀愛關係がこう云ふ事になるのは蒔かれた種が育つてあゝ云ふ實を結んだので當然な事だと思つて居ました。ですから今更其れを取り上げて何にか云つて見やうと云ふ氣にはなれませんでしたが折角の御申越しですから少し許り思ふ處を云つて見ます。

私は神近氏の今度の暴行を敢へて惡いとは申ません。彼女の戀愛に幾分でも眞實があつたならばあゝ云ふ行動に出るのは止むを得ないでせう。けれども彼女の戀愛に對する根本義が誤まつて居た事を悲しみます。一ッの植木鉢にいくつかの種を下せば其の種は芽を出し、根をはつて來ます。そして、其のいくつかの根は育てば育つ程お互ひが土の奪ひ合ひを始めます。もし其の鬪爭がないやうなら其れは愛ではありません。人間の肉體を物品視して、もてあそんで居るのです。

何千年の實驗、そして失敗の結果人間は不完全ながらも性的道德をこゝ迄進めて來たのにあの人達

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は船を逆に抑そうとするのですもの、怪我人が出來たり、こばッちりを受けて苦しむ人があつたり、あたりが騒々しかつたりするのはあたりまへではありませんか。

私はあの人達の戀愛關係のうちに何の意味も見出しません。大杉氏が自分の思ふやうに仕事が出來ない、精力のやりばのない、やけくそ腹でやんちやを起した。そして、ツイ、じようだんからこまが出た。とは云へ、もと〳〵やんちや坊チヤンのお相手をするのに命を投げ出したり、自分の第二の生命なる子供を捨てたり、本當に悲慘が通り越して可笑しいやうな氣持ちが致します。

あれを皆さんが自由戀愛だなぞとお思ひになつたら大間違ひ、あんな不自由戀愛は又とはありません。不自由でなくて何でせう。あの一團の間には傷害、怨恨、憤怒、焦慮とあらゆる人間界の惡い分子が充滿して居るではありませんか。

一體戀愛と云ふものは大きな役目を持つて居る。則ち戀愛は個人の兒成種族の向上の基調をなすものであるから、習慣に從つたり、金力になびいたり、其の外、外部の事情なぞで成立するやうな薄弱なものではならない、何處迄も自由の意思で、自己の慾望する處を土臺として對者を選擇せよと云ふのが自由戀愛なのです。けれども人の夫であらうが、人の戀人であらうが好きだから食附いて行くと云ふのは獸性戀愛です。獸性に自由はありません。獸性を自由だなぞと云つて振り廻すとあつちへ行つては打たれ、こッちへ來ては足げにされ、結局は身の破滅になるのです。

自由と云ふものは、私達が一ッの社會を形成して其の中に生活して居る以上、其の社會の認めた範圍内に於ての外は持つ事は出來ません。併し人間を超越して神性となり神國に住む人や、又人間以下に下つて獸性となり獸類の中に棲息して居る人は別として私達普通人はこの社會と云ふわくの外に無

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

斷で出る事は出來ません。

唯、心の中で思ふだけなら何を思つても差し支へありません。東京市の地所は皆自分のものだと思つたつて、男と云ふ男は皆自分の夫だと思つたつて誰も其を妨げるものはありません。けれども其の思つて居る事を外部へ出して、其れを實行しやうとすれば苦情はあつちからもこつちからも出て來ます。だから、其れを我がものとして取り扱ふとするには第一そうする權利を得なければなりません。權利を得るとは云ひ換へれば社會に認めさせる事です。認めさせるにはそうしなければならぬ事の正當なる理由を社會に提供しなければなりません。其の順序を踏まずに思つた事は何でも其のまゝ外部へほうり出して實行するのは社會を馬鹿にした不屆きな人間かさもなければ社會の存在を知らない野蠻人です。

舊道德の弊、因襲の弊と彼女達は絶叫し其れを破壞する事をもつて自分達の使命でゞもあるやうに云つて居ましたし、又實行したのですがこう云ふ事に就いてウォードは面白い比喩を書いて居ます。「こゝに一すじの道路があるとする。けれども其の道路は曲りくねつて居て誠に不便である。で、人々は其れをつぶして更に新しい眞直なものを造らうとする。だが、この場合にたとへ曲りくねつて居るとは云へ、其の道の出來た理由に就いて考察する處もなく、又其の道がどの位迄人々に不便であるか、又どのへん迄便利であるかを研究もせずに、いきなり潰してしまうと、其れは道路の改良にはならないで、とんだ、不便な事になつてしまう」と

私は大いたづら坊の大杉さんの行爲を憎みます。其の影響は貞節な妻女に血を吐く思ひを敢へてさせ、無心の幼兒をあたゝかき母のふところから離し、法律上の罪人さへも出したのですもの。同時に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あの二人の婦人が自分では新しいつもりで居たにも拘らず案外舊くて矢張り無智盲目な感情計りに制せられる、たゞの女であつた事を遺憾とします。だが、これが動機となつて眞の意味の自由戀愛と獸性戀愛との區別を廣く世の人が了解するやうになれば、あながち、此度の騷ぎも無意味でもないかも知れません。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

不自然なる自由戀愛の破綻

山田たづ

神近市子氏が相州葉山の日影の茶屋で、其愛人なる大杉榮氏を刺した、大杉氏は生命危篤である——此報導が私の耳を驚かしたのは其當日——即ち十一月九日の黄昏頃であつた。私はそれを聞いた刹那思はず全身に電氣を感じたやうな一種の衝撃を感じたのであつた。恐ろしいことである、が、私の恐ろしいと思つたのは其兇行を想像して恐ろしいと思つたのではない、それもそれは恐ろしいことには違ひないが、私は其恐ろしさよりも其人間が持つてゐる、知識の光を以てしても照らすことの出來ない猛獸のやうなパッションの盲動を恐ろしく感じたのである。そして斯る心理は獨り神近氏ばかりではない人間の誰がも通有して持つてるものだと思ふのである、が併し平常は極めて我々の頭の中に漠然としてゐるがそれが何か事に當つて多少明瞭な形に成つて來ても大抵はそんな行爲に移らない迄に反省して仕舞ふのである。が神近氏には其反省が出來なかつた、そして遂に斯る兇行を敢てした、それは罪惡に相違ない、そして世間の何人もが宥す事の出來ないことであらう。が併しながら氏をして斯る兇行を敢てせしむる迄の苦悶の心的經路に考へ至ると、私も又氏の爲に一掬の涙なきを得ないのである。

斯んなことはそれは世間から云へば毎日の新聞の三面記事にはザラにあることである、が苟も知識階級、しかも我思想界の先輩たる諸氏の間に起つたことは蓋し私共が、對岸の火事視して手を束ねて見てゐることが出來ないことであると思ふ。で私も此處に少し所感を述べて見たいと思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一體此原因は何であるかと云へば、それは言ふ迄もなく神近氏の嫉妬であると云はなければならぬ併し氏は或は其愛人を恨みの餘りに殺さなかつたとしたところで――氏は未だそれ程――其愛人に憎惡を抱いて復讐しやうとする程、幻滅して居るものでないと思ふ。畢竟私の考へるのではそれは一種の愛の占有慾から來たことであると思ふ。大杉氏を滅ぼして自分も滅びる、それは合意の死でないから其處に無理はあるかも知れないが、併し憎惡で持つて殺したものでないことは神近氏が大杉氏に追駈けられながら「宥して下さい」と、叫んだのに依つても分ると思ふ。而して神近氏の大杉氏を殺害しやうとしたのは密かに殺して自分の難を免れやうとしたのではない、大杉氏を殺すと同時に自分も滅びる積りだつたのである。人間は誰でも自分を保護したいものである。自分を生かし育て、保護して行くのが、これが人間の本能である。それだのに其生きるべき慾望を捨てゝ斯樣な兇行を行はうとするに、單なる憎惡や怨恨のために爲し得られるものでない、それは愛の心理は複雜であるから其愛の心理の裡にはそれは憎惡もあらう、又怨恨もあらうが、要するにそれは前言つた占有慾に裏書するものである。が人或は言はん、大杉氏を殺害するならばそれは神近氏でなく、寧ろやす子夫人がすべきものではないかと。しかし斯る兇行を演ずるのは弱者のすることである。やす子夫人は兎に角大杉氏に對しては夫人としての地位を有つてゐる。又野枝氏は今の處で大杉氏の愛を最も多く占めて居る。が神近氏は今の處尤も不遇な地位に居るではないか、神近氏が自由戀愛を主張して、やす子夫人から大杉氏を奪つた事の是非は暫く措くとして、其最も不遇な地位に居る神近氏が大杉氏に對して眞實な愛情を抱いて居つたとすれば、今回の兇行を演じたのが三人の中の神近氏であることは蓋し理の當然ではないか。それは平常から神近氏の大杉氏に對する要求は始終充たされないがちであつたに違ひない。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そして、其不滿が積り積つて到頭今回の兇行の原因となつたに相違ない、それに神近氏は其兇行に一種のロマンチツクな色彩を着けて、其愛人を滅し惹いて自分をも滅ぼすことを愱しんだかも知れないこれは餘りにロマンチツクな戯曲的な見方かも知れないが私はそんな氣がする、殺害未遂後の神近氏の態度が落着いて居るのは、最早大杉氏は死んだものと思つて、自分の死刑に處せられるのを從容として待つて居るのではないかと思はれる。

以上は神近氏の兇行に就いての直接の原因を擧げたのであるが、其間接の原因は勿論彼の大杉氏の稱へる自由戀愛にあると云ひたい、で玆に私は少し彼の自由戀愛に就いての感想を述べて見たい。一體愛と云ふもの丶心理はエゴイスチツクなものであつて、其或人の愛を一人で占めて居たいものである、親子、兄弟、友人間の愛情に於ても皆多少左樣云ふ傾向を持つて居る。が、親子、兄弟、友人間の愛では又其當事者同志に双方にいろんな複雜な交渉があつて、其自分の愛する甲なるもの丶愛を又自分の愛する乙なるものにも分け與へたいと云ふやうな慾望も起つてくる。で、そしてそれがだん〳〵と複雜な關係になり、それが進化して來て、遂々性愛以外の他の愛には占有慾が起らなくなつたのである。併し性愛は左樣でない、それは全然自分一人に於てのみ相手の愛を占めて居たい要求を持つものである。が、もしそれが占有出來ないとならば其苦痛煩悶は何者にも増して多大なものがあるであらう、そしてそれが嫉妬となり、其嫉妬が又怨恨や憎惡を生むことになる。で、性愛と云ふものは或其一人と一人との間に行はるべきものであつて、當然一夫一婦たるべきものである。何人でも自分を少し純粹にして考へて見れば左樣でなくては居られぬ筈ではないか。それは往昔から結婚の歴史には一夫多妻、一婦多夫、又は多夫多妻などいろ〳〵の歴史があつたけれど、それは其性愛がまだ審美的

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

愛にならずに只性慾の盲動にのみ動いて居たからであらう。が、戀愛と云ふものはそんな一夫多妻や一婦多夫や、又は多夫多妻の間に行はれるものではない、戀愛と云ふものは一人と一人の間にのみ行はるべきものである。それが戀愛の本性である。自然は人間の性愛と云ふものに恒久性を持たせる爲に戀愛と云ふものを造つたのである。左樣でなく昨日に甲と契り、今日に乙と握手するならばそれは戀愛とは云ふことが出來ない、只單に性慾の盲動に過ぎないのである。

左樣云ふ見地からいつて、大杉氏の稱へる自由戀愛說などは全然容るべからざるものだと思ふ。又或一派の人達の稱ふる自由戀愛、即ち甲に全然愛が褪めて乙に移る、左樣云ふ自由戀愛ならば多少肯定出來なくもないが、それは世の中に自分を生かし育てゝ行くのに最も適當だと思はれる異性は左樣急に見附かるべきものでない、それだのにそれ迄にいろんな誘惑や性の陷穽に引かゝつて或一人の自分に不適當なる異性に性愛を造つたとする。(これは勿論外面的にでなく內的にである)そして後日に至つて始めて自分に最も適當な異性を得て、前者に愛が褪めたと云ふのならそれは多少點頭けないこともない、が然らばそれは前者と愛の生活を絕緣してから後者を取るべきであらう、が併し其時に或は前者に憐愍が加はるかも知れない、而して其憐愍のために羈絆を脫することが出來なければそれは當然其後者に移るべき愛の道程を斷念すべきであらう。さもなくして後者に愛を移し、其處に二個或は三個の女性をして、互ひに胸中に刄を砥がしむるならばそれは兇器を持つて人を傷つけるよりもより以上の罪惡であるから。何となれば人間を精神的に傷つけるは肉體的に傷つけるよりも倘罪惡であり、人間を精神的死に至らしめるのは肉體を死に至らしめるよりも倘罪が深いと思ふ。

で、大杉氏の自由戀愛說は到底左樣なことが事實に行はれ得べきことでない、其行はれない證左に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はそれを稱へる大杉氏自身すら、それは無意識にしても三人に同じ程度に愛を分け得ずに、野枝氏一人に傾き、自分自ら一夫一婦の現象を現し來つたではないか、そして遂に神近氏をして斯る殘忍な兇行を演せしめたではないか。彼の當時三氏が共に某誌上に自由戀愛說を發表された時、私は斯る不自然なる狀態は到底永續するものでないと思つたが、果して斯樣な大破綻を來したのである。併し彼の當時あれを發表された大杉氏は知らず、他の二女性に至つては屹度あれは眞情でなかつたらうと思ふ。が、併し其愛人を愛するの餘り、其人の稱ふる說を否定出來なかつたのであらう、否定することが出來ないと云ふよりも或は其當時は野枝氏も神近氏も或は理論として左樣云ふことを信じたのかも知れない、併し左樣云ふ不自然な說は自然な感情に到頭裏切られて仕舞つたのであつた。

尙玆に一言して置きたいのは私は前に大杉氏の稱へるやうな自由戀愛でなく、一人の男性或は女性から他の一人の男性或は女性に移つて行く自由戀愛は或程度に肯定されるといつた。併し愛は自然の儘に放任して置けば推移すべき素質を持つたものである、戀愛と云ふものは恒久性を持つたものだとも云へるし、又恒久性を持たないものだとも云へる。其何れも眞理である、愛に恒久性を持たしのやうとするには、自然の儘に放任して置かずにそれを續かせるために努力すべきである。で、私は自分の生活から言へば、自由戀愛なぞは肯定したくない、他人のことなら前に言つた後者の自由戀愛（大杉氏の稱へるのでなく）なら或程度に肯定するのであるが、私の自分自身の愛の生活ならば飽く迄も一つの愛に終始したい、そのためにもし廣い人道的な意味から言つて、道にはずれたことにならうともそれは仕方がない、併しこれは無法なことかも知れない、又惡いことかも知れない、併し斯う云ふ頑な戀愛觀は寧ろ潔癖な私の趣味だと思はれるのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

舵を誤まりし戀愛

岡田幸子

神近氏、大杉氏殺害未遂事件が突發した。少くとも第三者の立場からしたならば突發と云ふより他に、適當な用語がない。然しながらその突發と云ふのは、只外面的に見た場合であつて內面的に見れば、その突發に至つた諸多の原因がなければならない。

支那革命黨の領袖、黃興が百年の大なる志を抱いて上海に逝き、蔡鍔が四百餘洲統一の大望を抱いて福岡に死んだ。その死んだと云ふ事實のみを見れば頗る唐突の感じがするけれども、その死を至した所の原因に遡つて考へて見たならば、原因は原因を生んで隨分長い歲月の昔に遡らなければならぬ事になるであらう。これと同樣に、神近氏が大杉氏を殺害せんとした突發的事件そのものを見たならば、確に突然に感じないわけにゆかないが、その事件を突發せしめたる所の原因を調べたならば恐らくは種々の入組んだ紛糾錯雜せる事情が、かうした結果を生んだ事が見られるであらう。

一般に歷史を研究する用語に遠因と近因と云ふ言葉がある。例へば明治維新の近因即ち直接原因をなしたるものは、薩長の革命的精神であるが、此の革命的精神を惹起したる遠因は世界大成の變化でなければならない。これは歷史家の云ふところの遠因近因である。又法律に於ても原因と云ふ事を重大視する。即ち刑法上に於て責罰を被る行爲、そのものゝ遠因原因は刑の適用上重大なる差等を生ずる。かるが故に刑法學者の中に於ては原因なる言葉の根本的詮索に、多大の努力をせらるゝのである

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

又科學者の法則を見出すと云ふ事は、これを要するに同じ一定の場合卽ち、條件のもとに於ては、一の結果は一の原因を誘發すると云ふ事である。

かゝる意味に於て總ての事情を探究し、一の結果を判斷する上に於て、原因は如何しても研究しなければならない一大要因である。私は今、神近氏對大杉氏の事件を判定する上に於いて、その事件にまつはる片々たる原因に對しては、第三者であるから、これを知る機會を得ない。又その當事者間に於ても些細な原因は、記憶に殘らないかも知れない。然しながら今迄に外觀に發表されたる所の重大原因、換言すれば大杉氏がやす子夫人、神近氏、野枝氏の三女性を對手として辿り來つた經路そのものは、或る程度迄私達の知る事の出來るものである。その私が知り得たる範圍内に於てこれを主要なる原因と見なし、今回起りたる結果に對して自分一個の說を述べたいのである。そのかゝはりたる所や、單に當事者間のみではない。總ての改革的精神を持つた婦人の進む道に相當の結果を及ぼすかも知れない。こゝに於て私は數言を費したいのである。

宇宙現象の理法原則を闡明しやうとするならば、その現象を引起す所の力、卽ち自然現象に於ては自然力、社會現象に於ては社會力なるものを明らかにしなければならない。社會力はこれを分ちて二とする事が出來る。これを心理的に云へば一は食慾であり、一は性慾である。食慾はこれが滿足を得るために物質の要求をなし、物質の要求は經濟價値の探究となり、經濟的勢力の社會に及ぼす結果、卽ちマルクスの云ふ唯物史觀を形成するに至る。他の原因たる性慾、換言すれば色氣、愛も亦、食慾に劣らざる勢力を社會に及ぼすものである。此の二つのものが社會力を構成するとしたならば、此の力を如何なる方面に流し、向はさんとするかと云ふ事は、實に社會學者の根本的對照としなければなら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ないものである。

社會力はこれを自然現象に例へるならば、流るゝ水である、空中に存在する電氣である。水、そのものは、それ自身、絕大の力を有する。時に荒れ狂ふた場合には、數丈の堤防も破壞し、一擧にして豐沃なる田畑を洗浸する事がある。その勢力たるや絕大無比である。これを善用するならば、人類はこれによつて榮え、これを自然に放任するならば、恐ろしき結果を惹起するに至るかも知れない。その力を如何に利用して人類の安全を計り、ひいては人類を益せしむるかと云ふ事は、此の力を如何なる方面に向はせるかと云ふ事である。その方面を知る爲には、その力の起り來る原因結果を知らなければならない。その原因結果を知るのは、取りもなほさず智識である。私が智識を尊ぶのはかゝる所以からである。

大杉氏對三個の女性は、愛と云ふ力によつて流された。私の見る所を以つてすれば、自然の力のまゝに流されてしまつた。水がいづれの方面に流るゝかは、當事者自身知らなかつた。乘つたる舟は潮流によつて矢よりも早く流されたにも係はらず、乘れる人は東西南北を注意しなかつた。暗礁は此處に於てか舟の行手に立ちふさがつた。舟は恐ろしい力でこれに衝突し、舟自らが招いた所の結果を享受しなければならなかつた。大杉氏がかゝる運命に立至つたと云ふ事は、さく可からざる力の結果である。

然らばその力を自然のまゝに放任せずして如何なる方面に流さんかと云ふ事は、愛そのものゝ解釋如何にあり、その愛を安定狀態におく制度組織でなければならない。これは個々の人の智識程度、及び智識傾向によつて、種々雜多な解釋を下さる可きであるけれども、要するに力をいづれの方面に流

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

したならば、その當事者、廣く云へば人類全體が利益を被るかと云ふ事である。
刑法の格言に、「己れに出でたるものは、己れにかへる。」と云ふのがある。これは羅馬法以來の格言であつて、よく原因結果責任ある所を明らかにしたものであると云ふ可きである。又性惡說を唱へて、性善說に反對したる所の荀子は「物類之起、必有所始、榮辱之來、必象其德、肉腐出蟲、魚枯生蠹、怠慢忘身、禍災乃作。」と。

大杉氏が三個の女性を對手にして生んだ所の愛は、いづれかと云へば自然的愛である。愛を自然に放任したる場合には、一より一に移り停止する事がないかも知れない。然しながらこれは性的愛、換言すれば自然的愛のしからしむる所であつて、愛が進化してロマンテイツク愛の分子を加へ、審美的の分子を含み、智識の量に從つて愛はしかく千變萬化するものではない。トーマス、ラーレーの言葉を借りて云へば、結婚する戀人同志は、もはや戀人同志のお別れでなければならない。戀に落ちてゐる男女二人は常に不安定な狀態にある。これが夫婦的の愛に立至つて始めて安定不變のものとなる。此の安定を保たんが爲に法律宗教は出來得るだけ永久的の設備をしたのである。

大杉氏は自由戀愛說を唱へられた。その內容は私はよく知らない。けれども私の考へてゐる所の自由戀愛は昨の女を捨てゝ、今日新たなる女性を得ると云ふのではなく、出來得るだけ、智識的に自由な判斷の上に立つて、生れた戀愛であると思ふのである。即ち現今の結婚制度は兩親先輩の判斷によつて生れるものであつて、結婚する男女當事者の自由判斷が阻害され、愛の前提を缺いてゐる故に、これを私は神聖なる自由戀愛と云ふ事は出來ない。然しこれと反對にその刹那刹那の愛、換言すれば一の力の自然のまゝに支配されて、智識の判斷を沒却したものは獸的戀愛であつて、自由戀愛とは云へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ない。大杉氏がやす子夫人から神近氏へ、神近氏から野枝氏へ漸次移つて行つた經路は私には如何しても嚴正な自由戀愛と見る事は出來ない。もしも野枝氏に對する戀愛が、强いものであるとしたならば、他の二氏を捨てねばならぬのは、當然である。けれども、眞の戀愛はかく常に移る可きものであらうか。

婚姻の歷史を探究すると一夫多婦制度、一婦多夫制度、多夫多婦制度、一夫一婦制度がある。その委しい歷史的觀察はウエステルマルク、及びルトルノーが詳細に行ふたものであつて、私がこゝに管々しく云ふ迄もない。只、私が云はうとする事は今の社會狀態として、一夫一婦制度が最も自由戀愛を保有し、人類の進步發達をなす上に於て、適當なものだと思ふのである。大杉氏が三個の女性を對手にしたと云ふ事は、この一夫一婦制度の範疇に入れる事は出來ない。從つて廣く人間としての立場から見ると贊成する事が出來ぬ。今度の勃發的事件もこの異常なる戀愛形式から出たものと私は考へるのである。

一夫一婦制度以外の制度から云つても、その實質的に見ると如何しても一夫一婦制度にならなければならない。一妻多夫の場合を考へてみるのに、その一人の女性は多くの男子の中から自己の最も愛するものを拔き出すか。或ひは男子中の最も强力なるものが、その婦人を獨占するか、その制度の形式はいづれにあるとするも、事實に於ては一夫一婦制度となる傾向がある。これを大杉氏の場合にあてはめて見ると、女性は三個であるけれども、大杉氏の愛する愛の對照物は野枝氏であつて、要するに實質は一夫一婦である。愛の生存競爭は此處にも行はれた。神近氏は强力によつて愛を得んとし失敗するに及んで、遂に殺害と云ふ樣な方法を用ひ、總てを破壞に導く事になつた。私は何處迄も一夫

Digitized by Google	Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一婦の主張者であり、又他の男女結合形式に於ても結果實質は一夫一婦になると云ひたいのである。此處迄述べたる所を總括すると、愛は力であり、それ自身絶大な勢力を持つてゐるが、これを自然に放任する時は決して人類の幸福を來すものではなく、最適當なる方向に導くのは自由戀愛を基礎とした、一夫一婦制度でなければならないと云ふのである。大杉氏の事件にこの理論をあてはめて見ると、自由戀愛そのものをはき違へ、一夫一婦制度を破壞したその結果、愛は自然のまゝに流れ、愛自身の特有性たる破壞力を發揮し、遂に當事者をかゝる地獄の境に誘導したのである。

（大正五、一一、一三）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私見

山田邦子

何事に依らず第三者の言ひたてる事といふものは、事の當局者から言はせると、間違ひの多い、從つて不快の感じの多いものであります。所謂無敎育(此言葉はおまり大まかすぎますが)の、ワイルドの輩でない以上、たとへ其結果が、それは無敎育者や、ワイルドの輩がやつた事と同じやうな事になつてしまつたとしても、そこまで行つたのには、いろ〳〵の事情――第三者には決して解されぬと言つてもよい程微妙な處に――がこだわつて、つひにそこまで行つてしまつたのに違ひありませんから私はそれらについてあまり議論などしたくはありません。

私は大杉氏はまだ存じませぬが、野枝さんにも市子さんにも一度づゝお逢ひしました。お二人ともお目にかゝつて決して感じの惡い方ではありませんでした。野枝さんには靑鞜社の玄關口で、私の歌「型片々」を持つて行つて三分ばかり立つてゐて御目にかゝりましたが、私は其時の第一印象で、大へん正直さうな、純潔な感情を持つてゐる、然し我がつよくて、可成り我儘らしい、いかにも新らしい集の女の人といふ感じを與へさせられたのでした。

市子さんには、それから一年もたつてから、橫寺町の藝術倶樂部で人に紹介されて御挨拶をしました、其時私の受けた感じは、野枝さんよりも、すくなくも賢い、といふ感じでした。野枝さんよりも世にも人にも慣れた、それだけしつかりした所を持つてゐるらしい、かうと思ひこんだ事はどうして

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もやつて見ないでは居られないらしい――さういふ處は野枝さんにもあります、然し野枝さんのは、どこか無茶の這入る、子供らしいやり方になつてしまひさうですが、市子さんはどこまでも、新時代の女らしい――さういふ感じを受けさせられました。然し其時はまだ野枝さんの問題など知らない頃でしたから別だん野枝さんと比較して考へて見た譯では御坐いません。

かう言つたやうで知つてゐたお二人の方が、大杉さんとこれ〲だと聞いた時には非常に吃驚いたしました。どうもそれを信ずる事が出來ないのでした。然し事實はぐん〲進行して、野枝さんは家庭を破壞して大杉さんの處に走つておしまひになり、どうでもかうでも事は思ひの先きを走つてゆくのでした。それで私は私として、野枝さんにつき、又市子さんにつき、其後いろ〲な事を考へさせられました。然しそれにしても、自分は第三者であるから、自分などの位置には分らないいろ〲止むを得ぬ事情から、あんな事になつてしまつたのだろうと、さう思ふ心はいつも心の底にありました。そこへ此度の事件が起つたのでありました。

扨此度の事件といふものを、かういふ立場でかういふ心持の私から論ずる事はどうかと思ひますが自分の立場から自分の意見を發表するとすれば、私は此度の事件にしても、お三人の關係といふものにしても、賛成する事は出來ません。

それは不完全同志の寄り合つてゐる人生ですから、此人に滿足出來ない事が、彼の人に寄つて滿足させられる事もあり、此人の持つてゐない特點を他の一人が持つてゐる事もあります。ですから此人は此人、彼の人は彼の人と、幾人もの人を好くといふ心持は實にあはれな事で人間としてお互樣人間の淋しさを味はされる事であります、人間として、すくなくも私としては、まだ完全な滿足を感じさせら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れる、立派な一人の人格者に出逢ひません。人間の心靈は圓くはない、みんなどれもこれもいびつくです、言をかへて云へば玉石混合です。ですからいびつく同志いろ〳〵に引き合ふのは無理のない事です。それですから罪人を憎めぬ心も湧かうし、又好き嫌ひの心も湧かうし、肝膽相照すといふ友も出來ると思ひます。然しそれを直ぐに夫婦或は戀人の關係まで引あげて來るといふ事に至つて始めて問題が別になつて來ると思ひます。其心持の理解出來ない譯ではないのですが、私にはどうしても贊成出來ません。此前に私はやはりさういふやうに行つた方が自然だといふやうな事を理論的に考へた事は有りましたけれど、今の私は、それはおそろしい空想で、事實人間は始めて神に造り出された其日其時から、一つの主につかへ、一つの戀に至誠をそゝぐべく本然と造られてあるといふ事を認めてゐます。然し其奉仕すべき眞の主、至誠に燃ゆるべき眞の戀に出逢ふまで、人はいろ〳〵の失敗を重ね、迷ひに迷つてゐるのだと思ひますから生產神が必ずしも其人の心靈をそゝいで奉仕すべき神だといふ譯はなく、第一の戀が必ずしも戀の始めあり終りであるべきものだといふのではありません。否々むしろ、よほど運のいゝ人以外には、迷ひに迷つたあげくでなければ眞のもの、唯一つのものには打突からないかもしれません、ですから私の言ふのはそこではありません、同時に二ッもしくは三ッを靈肉一體の深奥なる關係、實に特殊の關係に居る事は、絕體に出來ないと信ずるといふのであります出來ると思ふのは愚な事です、出來ると思ひ、やつてゐると思つても、それは事實に於て裏切られてしまふ人間の本然である事を私は信じます。又其位な深いもの、尊いものでなくては私は主なる神として奉仕する事も出來ませんし、戀といふ名もつけたくはありません。

「人は二人の主に奉仕する事あたはず」と聖書に書いてあります。深く生きやうとすればする程これ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は權威ある眞理だと思ひます。

まあ例へば、藝術家として考へて見ても、歌も作りたい小說も書きたい、俳句も習ひたいといふやうな人は、藝術の味へない人ではないでせうけれど、其眞ずゐに觸れた立派なものを作るには其なかの何か一つを選んで專門の硏究と苦心を積むのでなければ、所謂素人のおたのしみ藝と同じで、要するにしれたものだと思ひます。たとへ揷話みたやうに、小說家が歌を作つて見たり、歌人が小說を書いて見たりして見るとも、それは事々しくとがめる事ではないと思ひますが本業はどこまでも一つであらなければ、あれも黑人に、これも黑人にといふことは、頭腦は許しても心靈と血とが言ふ事をきくまいと思ひます。それと同じやうに同時に幾人もの人を戀し得る戀などはしれたものだと思ひます

私はこれを深く自分の心に照して、淚を以つて自分を省みつゝ申のであります。

又外の方の側から言つても、自分として與へるものを與へ自分として得るものを得る、といふのは分つた話ですけれど、同時に其人を外の人にも所有させておくなどは決して戀の本心の願ひではないだつうと思ひます。そんな戀ならこれもしれたものですけれど、私は此點では女のお二人に特に私自身の考へをあてはめて、お二人ともそれでは滿足出來ないが、今の處仕方なしにさう言つてあきらめてゐらつしやるのだらうと思つてゐます。そこで始めて此度の市子さんのやうな行爲が突發した譯だろうと思ひます。とは言つて來たもの丶これらの事を丸つきり愚かな、馬鹿げた事として一も二もなく笑ひ捨て丶しまふのではありません。あれ等の方々があんな風になつていつた心持は或る點まで分るつもりですし、あはれな不完全な吾々人間として、一笑に附し去る事の出來ない行き方が、その中にあると思ひます、然しそれにしても、それを眞身の戀の關係にまで持つて行つたのは間違つてゐる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と思ひます、即ち出來ない事をしやうとしたのに對して當然の缺陷が足下に出來た譯だと思ひます。不完全な人間が暖かに結び合ふのは、けがすまいとするよき友情、お互にお互を重んじ合ひ敬び合ひ大切に思ひ合つた上に築かれた淸い友情だと思ひます。たとへ或る人々にそれ以上を願ふ心が起つたとしても、此人こそは、と認めた一人を見出すの外は、深くめい〳〵謹むべきだと思ひます。それはやはり淋しい事です、又相應に苦しい事にも違ひありません、然しそれは人間としてなすべきの苦しみだと思ひます。

「もし右の眼なんぢを罪におとさば拔き出してこれを棄てよ、そは五體の一つを失ふは全身を地獄の火に投げ入れらるゝよりはまされり」としるされてあります、これはどんなに人間の淋しさに同情して、其上でなほなすべきのよき道を示されたかしれぬ聖言だと思ひます。

最後に私はいま一つを書き添えます、それは野枝さん對お子さんの事であります、私はいくら考へても野枝さんがお子さんを人手に渡して大杉さんに走つたといふ事が分りません、大きい方のお子さんはまづ御主人の方へおあづけになつたさうですからよいとして、いま一人のお子さんを千葉の荒物屋へおやりになつたといふのは眞實でせうか、これが眞實とすれば私はどんなにしても野枝さんの心が分りません、それは人間は迷ひ安く特に女は考への淺い弱い(特に現代の日本の女は)ものですから一生かけた戀人でもない人と結婚してしまつて、後に目がさめたやうにいろ〳〵と悶えはじめる事が多いと思ひます、此點を押し進めて考へてゆけば、夫とは或は別れなければお互に居られぬやうにならないものでもなかろうと思ひます。然し子供が出來てしまへばそれはほんとに特別な關係になつてしまふと思ひます。私たちは自分と同時に子供の第一日から成長の後までを考へてやらないでは居ら

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れぬと思ひます、しかもそれ程重大に考へても、なほ子供と別れてしまはねばならぬやうな事が出來て來まいとも限らないのですけれど、其時はもう半分自分は死んでゐる時だと思ひます、いや〳〵女にしては死ぬよりつらい事かもしれないと思へます。さうしてそれ程、御命よりも大切な、――たとへばペテロや、ポウロや、ステバノの信仰問題程重大な――出來ごとが其心なり周圍なりに起つて來て、家に別れ子に別れても、やり遂げなければならぬといふ絶對の事に對する外は、子と別れる事が出來るでせうか、たとへ刹那的、時間的に、さういふ心の影がさす事があるとしても、そんな事くらひでそれが實行出來るものでせうか、まづ自分と引別れた、第一日のこの子供の姿を思ひ浮べて見てさへ、そんな事は出來ないはづだと私には思へます、それをまして他人の處へやつてしまふなんて、一體これはどうした事でせう、私にはとても想像がつきません、野枝さんは本氣でそれをなさつたのだろうかと思へます。もし本氣でさうなさつたならば、私は野枝さんに聞いて見たくてなりません、それ程重大な心の出來ごとを、くわしく〳〵心ゆくまで聞いて見たいとさう思ひます。さもない事には、よくも〳〵さういふ心になつたものと驚きを通りこして不思議になつてまゐります。それは輕い心ではずゐぶんいろんな事を考へないものでもありますまいし、又夫との間にどうしても相容れない點があれば、ずゐぶん本氣でいろんな事を考へさせられまいものでもないだろうとは思ひますけれど、それでも子供に負はされた、母の愛の責任（物質的の意味に非ず）は、自分を本流の潮のなかに流しこんでゐて、どうにもならないものになつてしまつてゐるやうな氣がします。然しこれらは皆、今の私の心靈から生れてくる考へで、もつと立派な人になればもつと立派な考へがあるかもしれません。私は今は私の立ち場から彼の人々を眺め、私の考へを述べるとすれば、かうより外は言へません。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

難しいお答

久保田富江

今度の大杉氏等の事件に就いて、何か感想をとの仰せですが、私として只もう大變な騒ぎが起きたものだ、と驚くより他はないのです。全體私共は、何う考へても彼等と交渉を持つてゐない人間ですし、又持つてはならぬと思ひますから、どんな立場を占めて批評をするのが、最も安全であるかをよく辨へませぬ。無論なし得べき資格を持たぬ者である故、或點から云はせると生意氣すぎて、心良からぬ印象を殘しはしまいかと恐れます。あまりに彼等から比較して意氣地なし弱虫臆病、若しくは偉くない人間であることを悟らせられます。

私は大杉氏といふ人を全然知らない。續いて神近市子なる人も知らない。書いた物を讀んだ事もありませぬ。私たちの生活に觸れない評論は讀みたくもなし、又何々主義とか、主張とか、怖いやうなあの人等の思想を、てんで私は考へ遣らうともしてゐませんでした。野枝さんの事だつて、私は平常から敬遠主義を取つてゐました。何故か私は野枝さんに初めから深い交渉を持ち度くはなかつたのです。私たちの小さい生活を支配する狹い思想中に、彼樣な方面の人達の事は、入り切れはしなかつたのです。一寸觸れても彈き飛ばされる形に、彼の人達の事皆は私共にとつて大きすぎ、力が强すぎたのです。そして、私共に同情がありさうでゐて、極く冷めたいものでした。なまじいな事を喋ると、或所から妙な反感を持たれ、揚足を取られたり呵責められたりする恐れが無いとも限りませんから、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

滅多な氣焰は吐きません。今度の事件は隨分人騷がせ世間騷がせ、而して文壇騷がせとでも云ふべきで、考へると何だか無暗に面白くて、一緒にワイ〳〵浮れた野次馬になつてみたいやうな氣もします若如何に傲膽な偉らい野枝さんでも、今度の事件には流石に驚いて取亂さずにはゐられないでせう。若し飽迄確實な思慮を此の際廻らす事が出來、それが一般に肯定させ得らるものであるならば、それこそ野枝さんは神樣程偉い人でなければなりませんけれど、大杉氏が生命を取止めると、不確ながらも明らかにされた上は、野枝さんの向ふ見ずな一騎に我意を通さうといふ平常の氣性も、必ずとちるに違ひありません。何も彼も一息に片が付くやうに、何故大杉氏は殺されて了はなかつたのでせう。問題は問題として、私達まで大杉氏が死んで了はなかつたことを不本意に思ひます。此の後が又暫く世の中の煩い事の一つとして、幾時日かを殘つてゐるのだと考へるとやり切れなくなります。大杉氏を墓石に變へ、神近氏へ死刑の宣告を與へ、野枝氏をして尼にならしむる、そして悉皆解決がつきさうなものだと思はずにはゐられません。今後は如何に縺れて行くことやら、三人共よく〳〵罪惡の深い人間に生れてゐると見えます。

神近氏が大杉氏を殺害しやうとした原因が、世間一般の男女間の痴情からと知れて見れば、彼の人達の思想や主義だの主張だのを、仰山に並べて批判する必要も無い。そして神近氏の行動を云々するには、矢張り女性は女性同士、彼女の心理を察して可哀想と云ふ他はないのです。此の人が大杉氏に對して極めて眞面目な戀をしてゐたことゝ、その眞劍さから來る感情の激昂が、彼女をして强いヒステリーにならしめたことなど、雜駁な新聞記事に依つても尙よく解せられますが、要するに市子とい ふ人は弱い女なのです。私は此の際大杉氏の二重性三重性ある、又以てそれを誇りかに持つてゐる彼

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の、圖々しい浮氣(?)を無茶に憎みたいのです。思ふ樣呪つてやりたいのです。野枝さんには無論同情を持つことは出來ませんが、野枝さんの事を考へる前に、大杉氏を忌避し排斥して了はねばならぬと思ひます。尤も野枝さんが獨身者であつた時に於ける關係から、今のやうな問題が起きたとすれば、或は今回程の損な立場には居なくてもよかつたでせうが、野枝さんは女の中でも日本一の愚な女性と相場を定められても、ぐうの音も出ないやうな境遇にあることを、身から出た錆と大人しく諦めて了つた方が好いかも知れません。それと比較すれば神近氏には幾分かしほらしい所もあります。野枝さん程の厚面しさが無いだけ(無論野枝さんも弱い人だが)同情するにしよいと思ひます。然し彼女の弱さが私は飽足らない。何故大杉氏を殺し切らずに、追驅けられた際、「許して下さい〳〵。」などゝ云つたのでせう。芝居めくがこんな時には矢張り屍に向つて、詫びをする方が强味があると思ひます。これでみても、神近氏は大杉氏に對して、意氣地なしな、最も弱い女の位置にゐて、最も無智な戀をしてゐたかゞ解ります。私は兩女の年齡からしておもふ時、旣に中年の女である神近氏の心理に、打堪え難き苦惱あることを知り、同時に彼女の神經は絶えず異常に昂奮しつゞけてゐた事を察します。

兎に角人物とか思想とか智識とか云ふものを、絶對に此の意味に含めずして三人の者を見る時に、私はどうしても神近氏へ一番寬大な點を與へたいと思ひます。如何に無智な俗階級の者の間に於けるそれと同等な事件でも、焦點は只一つであれば、今度の騷ぎが假令彼等の間に起きやうと、何等誇張的に批判する必要は無い筈です。頭で生活する者の中でも、恐らく著名な者であるに依つて、一層姦しくなるのでせうが、私は今後彼等が明らかに世間から排斥され終る者として、あまり尊げな問題になることは、徒らに人々の頭を撹亂させ、騷々しくさせるばかりで、自分達を考へる餘裕を失はせる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

場合を恐れます。こんな問題からは距離を遠くして、願はくば靜に自身を守りながら（只専念に見聞を廣くし研究を重ねて）進んで行きたいものです。

何か考へて見て考へた儘を書いて行くつもりでしたが、どうやら書くことも無くなつたやうです。頭が云ふ事が面倒になつたかも知れません。私達は偉くない人間だといふ事を更に悟らせられます。最後に、幼稚で理由も解らないのに、無理な附燒刄するのも恐ろしい冒險です。もう彼の人達は今後界には、片隅なりとも住みたくない。彼の人達が厭だ、彼の人達は駄目である。私は只彼の人達の世駄目になつて了ふ。と云ひ縮めてペンを置きたいと思ひます。（終）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

お三人の爲めに

野　母

私は此度の事件に對しては、非常な不快を抱いて居りましたので、筆にするだも厭な心地がいたして居りましたが、つく〳〵考へ升と三人の何れもが眞實にお氣の毒なくらやみの人だと沁み〳〵思ひます。

私は野枝さんに對しては、絕對に同情する何物をも持ちません、何も彼もがミンナ野枝さんの不謹愼と、不面目と、そして傲慢から起因した事だと思ふと、たまらなく憎惡の念が起つてなりません。いくたりもの人を犧牲にし、そしてあげくの果てにこん度の樣な事を惹き起した野枝さんには人間としての心があるんでせうかと疑ひたくなります。

無智の女でもめつたには仕兼ねる樣な事を平氣でしてる野枝さんに眞實の戀愛が出來る筈はありません。余り周圍を馬鹿にして勝手に自由戀愛だなんて名目のもとに、獸類にも劣つた樣な眞似をしてゐた結果は笑ふにもたえたやうな事になつてしまつたではありませんか。野枝さんの氣性で、大杉さんに對して眞實の心があつたら大杉氏を立派に主義の人として立て通さしたでせふと私は思ひます。

此點では神近さんにはいさゝか同情の心をもつて升。自分の力で生活し、自立してゆく外に大杉氏に對し精神上にも物質上にも盡くした眞情はまあ戀愛といつてもいゝでせう――少なくとも女郎に等しい野枝さんの墮落の心に比しては――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が然し私は自分の信仰の立場から、今一歩神近さんに精神的の愛がかつてたなら、今少しひろい考へを以つて立派な態度に出られたと思ひます。

私は大杉氏に對しては、主義を主張する人として政府が加へる壓迫のために自活の道をたたれた爲めにぐらついたと云ふ事に對しては氣の毒に思ひます。而し主義と、自己とに忠實でなかつた咎はまぬがれますまい。

要するに大杉氏も野枝さんも余り自分を利口者振つたおかげに一番劣等な行爲をしたことになつて仕舞つたのです。これも自由戀愛のおかげでせふ。

而し此寒に向つて神近氏が獄中生活もつらいでせふと思ひます。大杉氏全快のあかつき、野枝氏と大杉氏のとるべき態度、についてはー般の人が一樣に好奇の眼を目張つてることでせふ、私は三人の方が各自無智な人達の眞似も此位できり上げて、馬鹿にしてゐた世間に對しても、又僞つてた自己に對しても、ほんとに眞實な心をよび醒して、心機一轉、意義ある新生涯にすゝまれん事を切望して止みません。別して野枝さんのために………

勞働の神聖を叫ぶ人を戀する女なら、賣女に等しい境地を脫して、神近さんに云はれる迄もなく、立派に女工になり上つて生活の道をとつたら、そこに彼女の新らしい道は展かれてゆくでせふ。更に私は野枝さんが今迄の傲慢の心を捨てゝ、眞の意味の乞食の心にならん事を切望します。

Blessed are the poor in spirit, for theirs is the tingdom of heaven. wat. 5 : 3.

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

不自然な戀愛の災禍

生田花世

神近さんの行爲は何人もが是認し難いやうに、私も亦是認は出來ませんけれども、是れを全然無智の行爲として非難する事も亦出來ないと思ひます。神近さんがあの行爲に出たのを單に低級なる嫉妬として大ざつぱにかたづる事は出來ません。生活上のいろ〳〵な原因もあつて隨分復雜な心理の結果でもあり、また愛の專有慾から來た切實な心持からだと思ひます。神近さんは愛する人を殺して自分も同じ刄で自殺する、さうした夢幻劇を憧憬したのに相違ありません。その心持は戀愛の高調した時に何人もが、——特に情に陷り易い女性の胸には——容易に到達する心持ですから、神近さんの心理、また行爲に對しては、男性はしらず、女性は必ず激しい非難を加へるのに躊躇する事と思ひます。

然し理智を貴ぶ女性として、又自覺ある人として、殊に神近さんのこれまでの生活に對する宣言の上から云へば、あの行爲は神近さんが、どの點からも自分自身に裏切られてゐる事となります。そして神近さんが意識して行はうとする不自然な戀愛生活を、感情が無意識に自然に引戻したといふ觀があります。そして考ふべき根本問題を澤山突きつけて、其の反省を迫つてゐる譯であります。

他の婦人の夫を犯す事の厭ふべき事。大杉氏の自由戀愛說の不可能な事。不自然な戀愛生活のかもす災禍に陷る事。

少くとも此の三つだけでも獄中の神近さんの心に日々夜々反省をせまるのであらうと思ひます。獄

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中の靜寂は必ず神近さんの頭を冷靜にしてそれに氣が附くやうにするであらうと思ひます。

澤山の人々を（また自分自身をも）今苦痛にし、不幸にしてゐる大杉さんの自由戀愛說、――男女ともに戀愛を自由にして決して嫉妬行爲があつてはならないと云ふ――は私にはどうしても是認が出來ないと思ひます。何故といふにさうして同時に多くの異性に平等に愛をわかつと云ふ事は不自然な事でもあり、又あまりにそれぞれの人格を無視し、其の靈魂を蹂躪しすぎる事で、第一不可能な事だと思ふからです。あまりに女性を物質視しその生活を輕蔑する事だと思ふからです。

それは直ちに當人なる大杉さんによつて立證されてゐると私は思ひます。氏は現にその災禍を自身で浴び、自ら運命があたへる苛責の鞭を受けてゐるのですから。そして聰明なる氏が殊更に行はれ難きを知つて同時自由戀愛及び家庭をいとふ事を口實にした事が或る策略――野枝氏との結合をもつとも非難少く且つ容易に成立させるための――としたかのやうに思はれる殘酷さを氏の人格の爲に悲しまずにはゐられません。云ふべき事はまだありますが多少憚かつて擱筆します。

私は野枝さんと大杉さんとの今後をぢつと見て居りたいのです。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

冬近く

齋賀琴子

ものいはずけふもわが師はさみしげにこもりたまふか小春の一日

縁日のどよみの中をゆく〳〵もさみしき君がかげこそ見ゆれ

うらかなしきのふもけふもだんまりのあるにあられぬ日を過しけり

ひろ〴〵と黄にうらがれし武藏野の木々の梢に秋風鳴るも

あざやかに燃ゆる紅葉の一本のこゝのみ寺にあるがかなしき

しづかなるこゝのみ寺に冬ごもりもの思はめやも我家とほく

武藏野の畑に農夫ら日をあびて大根をぬけり冬近ければ

武藏野の野の片隅に農夫らは大根を洗ひ日を暮すなり

見るかぎり大根畑のつらなれる野に立ち風に吹かれけるかも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いつしかに秋はふかみて我窓の梧桐の葉もまばらなりけり
穂すゝきの白く光りて行くみちに陽はかぐろはずかなしかりけり
かさ〳〵と落葉をわけて現はれし小犬ありけり秋の山みち

井上正夫のベルスを演伎座にて観る

ベルス！ベルス！叫びて彼は狂ほしく走りまわるか舞臺の上を
審判の幕引かれたり鎮まりて催眠りてかれは罪を語り出づ
縄を縄を！云ひつつあはれ人間の悩みのはてにかれは死にけり
ふるさとのかのさゞん花の咲き亂れもち啼きわたる山ちこひしも
みちのべの菊はしら〳〵光りたり冬近き朝の風のつめたさ
流れ行くつめたき水に手を浸しひろはんとしぬ黄菊の一枝
しぐれ日のいつしか暮れて打見やる向ひの家にともる電燈
人間のそのさびしさのいやはてにあこがれてとほく旅に出づるも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

詩

白き鳩

吉屋信子

あゝ
さびしからずや
ま白き鳩はとびさりぬ
あはれ
とはにかへらじといふ。

ねむる子

眠れるおさな兒よ
あはれ
おんみの小さき心の上に
時はおそひつゝあるをしれりや
おそろしき時の汀に眠る幼兒よ
時の潮はおん身をおそひつゝあり
時の波うつ音をきかずや

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

舟中の幼兒

川の上
船は流れずはた沈まず
さながらに浮べる木の葉
一つの小舟
漂よふ水の上
かすかに川陰うつらふ
黄に綠に淡く――
翳かげりてほの暗し
舟のともにおさな兒ひとり
足も手も共に小さくはらばへり
小さき彼は人なき舟にたゞ
ひとりうごける生もののごとし
小さき彼の瞳は圓らの水の面に見開く
おさな兒よ
ゆふぐれの水の上の舟の中
たゞ一つをかるゝ生ものゝ汝よ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おさな兒よ
空より下る一すじの神秘の白き糸を
辿りつゝあるやおさな兒
水の面を透し見て水底にかくれ咲く水藻の
花の囁を聞きとりてあるやおさな兒
大人には解し得ざる
神のことば
大人には知るを得ざる
空に描かれし繪畫を
汝は解し
汝は視る
あゝゆふぐれは
仄なるうす色のカーテンを地上に覆ひたり

――

おさな兒よ、
あゝされど、かすかに身うごきだにせず
水の上に漂よふ
小舟の中にありて……。

（一九一六、八月）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

初戀（三）

——チヤールス・ガヴイス——

坂本眞琴譯

ステラは曾てフローレンスの敎會堂で、大勢の信者が熱心に膝まづいて唱つた時の讃美歌を思ひ起してそれを彈き初めた、そしてそれに和して靜かに花の唇を開いた。靜かに、重い夜の空氣が急に動搖し出した。若々しい聲音に老書家は感慨無量と云つた樣な態度で皺の手を顏にあてた儘身動きだもしなかつた。歌ひ終ると彼女は立ち上つた、彼はあはてゝおし止め、

『お前の聲はお父さんにそつくりだ、今一度歌つておくれ』

彼女は素直に此度は面白い節の唱歌を歌つたが、丁度それが了ると、かすかに靴音がしたので振り返ると伯父は戸を開けて出てゆく處だつた。彼は長い間忘れて居た過去の樣々の幻影をステラに依つて呼び起され、遂に耐え兼て座を立つて仕舞つたのであつた。

ステラはオルガンを離れて窓際に來た、隈なき月光に照らされたる幾うねりの川の水は青い光にふるへ乍ら靜かに流れてゆく。殆ど無意識に彼女は誘はるゝ如くにして小さい庭にすべり出た。音のせぬ樣に門を開いて輕い足どりで川岸に立つた。晝間見たらどんなに美しいだらふと思ひ乍ら夜目にもしるき花の小徑をゆるやかに歩いていつた、幾度も々々も屈んでは花を手折りながら行くと

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

やがて後ろの方から馬の跡の音が聞えた、それが漸々彼女の方に近づいてゆくのを知ると、彼女は急に驚ろき乍ら振り向いた、馬は丁度其時後の横道から現はれた。

彼女は遙かに見える小さい門を透して見て意外に遠道したのに氣が付いて引き返そうとしたが、道が如何にも狹いので仕方なしに身輕に崖に飛び登つて、大きな木の下で待つた。馬は暗い蔭から現はれた。馬上の人は若い、美しい紳士だつた。丁度馬がステラの前迄來た時、馬はハタと止まつて仕舞つた。彼女は馬上の人の若い、立派な殿振りに驚ろいて目を見張つた。乘手は馬が止つたので、鞭を上げて打つた、馬は動かなかつた。彼は再び打つた、けれ共矢つ張り動かない、

『驚ろかせるなあ、如何したと云ふんだ、さあ行け！チョッー』

彼は宥め乍ら聲をかけた、馴れた主人の聲に馬は嬉し相に耳を動かしたが、矢つ張り足を震はして立つてる、三度彼は鞭を上げた。

木蔭の暗にかくれて居たステラは

『あ丶ちよつと』云ひ乍ら出て來た。

彼は驚ろいて聲の方を透し見た。

『誰です、誰ですか？』

彼はや丶聲を荒らげて何を？と云ひかけて、急に言葉を切つた。ステラの美しい顏が現はれたので直ぐに馬から下りた。

『あ丶失禮、あなた驚ろきになつたでせふ？　誰も居らんと思つたもので……どうも失禮』

『い丶え、私は驚ろきませんけれ共、あなたのお馬が、私を！私を見て……』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『あゝ此馬はいけない奴です、さあもうおかまいなく通つて下さい、下してあげませふ、失禮ですが……』

ステラは默つて微笑乍ら臆病らしく彼の手を借りて下りて來た。

『あなたお寒いでせふ？春でもまだ時々は此樣な寒いことがありますから…お宅は遠いですか？』

『いゝえ私寒くはありません、有難う』

『お宅は此處から離れてますか？』と彼は再び繰り返した。

『いゝえそんなでもありません、すぐ其處の白い門の家ですから』

『白い門？畫家のエテレージ君の？』

彼は意外だと云つた調子に言葉をつゞけた。

『あなた其家に御住ひですか？』

『えゝ』

『私まだお見掛した事はなかつたですが……』

『ハイ私たつた今晩來たばかりですの』

『今晩？それでは其筈です』

彼は馬を後ろにしてステラを送つて來た、門迄來た時ステラは立ち止り、

『有難う御座いました、お休み遊ばせ』

『おやすみなさい？あゝもし、私實は最早歸國しますから今承つて置かないと或は機がないかも知れんです、失禮ですがお名前を！』

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『私？　私エテレージ、ステラと申ます、エテレージの姪です』
『ステラ、ステラさん、あゝ左様ですか、有難う、私は――帽を脱ぎ乍ら――私の名はトレーボン、レイセスター、トレーボン』
『存じて居りました』
彼女は無意識に云つて仕舞つた。
『御存知でしたか、だつてあなた今晩御出でになつたばかりで！』
『……私あなたのお肖像を拝見しましたから！』
『あゝ左様でしたか、………ではお休みなさい』
『お休み遊ばせ、御機嫌宜う』
ステラは可愛らしい手を出した、彼は其手を握り乍ら、『又御目にかゝりませふ』と云ひ乍らヒラリと再び馬上の人となつて鞭をあてた。
彼女は暫し遠ざかり行く人影を夢見るやうな眼で追ふた、そして裏庭の方から漂つてくる伯父の聲に驚ろかされる迄茫然として立つて居つた。
『お前何處に居たんだえ、わしは亦お前が心變りして逃げていつたと思つたよ、ハッハ…ペンツォールドは牧場の方迄探しに行つたよ』
『ホゝ…まさか、私ね此先の小徑の處へゆきました、そしてね伯父さま、珍らしい事に出會ひましたよ』
『珍らしい事？』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『え丶、私ね、トレーボン子爵に御目にか丶りましたよ』
『トレーボン子爵に？　何時來たかしら？　如何だい、わしの肖像に似てるかな』
『え丶似ていらつしやい升よ、ケド私月の光で見たばかりでせふ、だから明白きりはわかりませんがね、大きな馬に乗つていらつしやいました』
『あ丶左様だらふとも、又屹度流星の様に飛んでいつたらふ、左様だ、それじやわからぬ筈だ、批評なんか出來る筈はない』
『い丶え飛ばしてはいらつしやいませんでしたよ、其積りだつたかも知れないけれ共、馬が止まつて仕舞つたもので。……私が崖に立つてたもので屹度驚ろいたんでせふ』
『止まつた？　これあ不思議だ、そんな事に頓着する人じやないがね、止まつたかい？』
『それあどうすることも出來なかつたからでせふ、馬が動かなかつたんですもの』
　ステラは小聲で辨解らしく云つた。
『荒々しかつたかい？』
『い丶えほんとに落ち付いてましたよ、それこそ俚言の羊のやうに……ホ……』
　調子のい丶笑ひ方をしながら輕く答へた。
『餘つ程拍子が好かつたんだ屹度、それにしても今夜外出するのはおかしい、ホールは宴會で大變な客だのに……尤もそんな事にかまつてる人じやないから。……それじやわしの畫とはどうだい？』
『そうですね、大變美麗な方ですね、濃紫のベルベットの上衣らしかつたですよ、私男の方がアンナ色を著るのははぢめて見ました』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『あれあ Smoking Coat だよ。乾度急に出たくなつて馬に乘つて川向ふへでもいつたのだらふ。それにしても又すぐロンドンへ歸るだらふよ、如何しても彼地の方がいゝと見えて、此地には一日か二日しか居たことがない』

戸が開いて燭灯を持つてベンフォールドが這入つて來た。

『まあステラさん、驚ろかせなさい升ね、私あなたが又御歸になつて仕舞つたかと思ひました、さあもう御疲れでせうからお休みなさい、お床も出來て居ます』

愛相よく笑ひ乍ら老婆は温い表情を浮べた。

ステラは伯父の處にゆき口吻した。

『おやすみ、お前の家の最初の夜だ、ゆつくらおやすみ』

彼女は伯父の此言葉を涙の出る程うれしくきいた。

『私の家？ 伯父さま有難う、おやすみなさい』

老婢の心盡しで小さな部屋は懐しそうな空氣を漂はして新來の客を迎へた。

（四）

テーブルを圍んで公衙に對して居た夫人は、トレーボンの一擧一動を熱心に注意して居つた。

『ねえあなた、レーセスターは今夜は少しも落付きませんねえ』

『左樣だ、わしもそう思つてたが、お前はどう云ふ理由か知らんかい』

『否え存じません、食事の時には變りはありませんでしたがね』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『何故あれは普通の人の様にする事が出來ないのだらふな、客を措きさりにして馬になぞ乘り廻すなんて……困つたものだ』
『ほんとにあの子は他人とは違つて居り升ね、何でも彼でも自分の思ひ通りにして仕舞ふと云ふ氣性ですからね』
公爵は暫らく手を後ろに組んだまゝ默して居つた。
『……あれはお前に此度の一件を話したかね、あの費つた額を……殆ど五十萬近くだ、何ぼウヰンドワードだつて嚮かぬわけにはゆかないよ、あんなに費はれちや……』
『存じて居ります、全部話しました。私にはよく解りませんけど、何でも名譽に係る事だからと申ましたよ、競馬があの人の唯一の道樂ですから、多少同情はしてゐますが、………誰かがあれの名を騙つて不正の事をしたので、其爲めあれが馬をひき出さねばならない破目になつて仕舞つたんだそうです』
公爵は長嘆息をした。
『それは左様に相違あるまい、然しどつちにしてもまるで狂氣沙汰だ、何時迄も際限がない。一體彼は何故結婚しないのかな』
夫人は美しい目を見張り乍ら彼を見上げた。
『あれは自分が撰んだ戀人が出來る迄はとてもしますまい』
『餘り頑固過ぎる、それあ普通の人ならまだよからふ、然し俺は此タイトルをわし等二人限りで失つて仕舞ひ度くない。お前は何故言つて見ないのかな、お前の云ふ事なら何でも聽くやうじやないか』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『でもこればかりは私が何程申たつて駄目で御座い升』
『それじやリリアンに云はせたらよからふ』
『リリアン？ 駄目でせふ、矢つ張り、あの娘は彼れを崇拜して升、そして世界中のどんな女でも到底レーには相應しないと申してる位ですから』
公爵は眉をひそめ乍ら『みんなお前達があまやかして增長さして仕舞つたんだ』
『いゝえ決して左樣じやありません、あれは今はもう一人前の男で御座い升よ』
再び彼が口を開かふとした時面會人があると知らして來たので夫人はすぐに隣室に退ぞいた。其處には夫人よりも年重の丈のひくい瘦せた婦人が紙鋏を持つて立つて居た、彼女はロングフォースのドーワゲル伯爵夫人で、親切らしい飾氣のない婦人だつた。
『ねえエテル、レーセスターは段々好男子になつてくるのね』
目を他に向け乍らこう云つたが、夫人が嘆息を洩らしたので、再び元氣よく云つた、
『如何したの？ あの子がどうかしたと云ふのですかね、教會でも燒いて、下僕の娘とでもかけ落でもしましたかね……ホ……』
『どうして、何にもしないから困つてるのですよ』
『ほんとにねー』相手が極めて眞面目だつたので彼女はしんみりとした調子になつて、言葉をついだ
『あの人が沈默してる間が一番危險ですね、全く。それでもあなたはあの人が亂暴しない樣にと心配してるんでせふ、何時でも…けれ共ね、あゝ云ふ人を世の中に出そうと思ふには何にも結果なんて事は考へないで、大目に見てやらなくては駄目ですよ、寧ろ罰金でも用意してかゝると云ふ風にしてや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らなくては――私ならこんな風に考へて滿足して居升がね』
『あなたはまだお解りにならない』
と云ひ乍ら洩らした夫人の笑の中には悲痛の色がひらめいて居た。
『否え解つてますよ、兎に角ね、あの人に結婚させるのが一番いゝのですよ、……今レノア、ビラミンスターは何處に居るの？あの人が一番好配遇者だと思ひますがね、あの人を一度呼んでみてはどう？屹度喜んで來るに違ひない』
『私は餘り適當な人だとは思ひません、レノアは傲慢ですからね』
『あなたはレノアを誤解してる、あの人はレーセスターより外に思ふ男はないと云つてますよ、それあ傲慢な點もあるけれ共、惡るい人じやありません、兎に角一度呼んでごらんなさいな』
夫人は暫し考へた末レノアをよぶ事にして手紙を書きに立つた。
『いつでも御都合のいゝ時、一週間斗り滯在する積りで來ませんか、少しはお友達も居りますが、御身に暫らく逢はないから物足りなく思はれます、御都合で何時でも待つて居り升よ！』
さよなら
エテルより
愛する
レノア様
二伸　レーセスターも來て居ります。
書き了へた時レーセスターが這入つて來た。
『手紙ですか、母さん？』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『えゝ……何處へゆくの？』

『十時ですよ、母さん』彼は棚の時計を指し乍らはなやかに笑ひ乍ら輕く答へた。

『あゝ左樣でしたねー』

と云ひ乍ら立ち上つた母の美しさを彼は子供らしい誇の眼で見下し乍ら、やがて輕い接吻を母の頰に殘して出て行つた。見送つた慈母の目にも愛の誇が極めて鮮やかに輝いてゐた。

× × × × × ×

階下から洩れて來るオペラの音を聞き乍ら彼は氣輕に階段を登つて、廊下傳ひにつき當りの室の前に來てノックした、其時には最早唇の邊に漂つて居た輕い笑は失せて仕舞つてゐた。

部屋は小さいが、立派な家具で、風變りな裝飾が特に目を惹く樣、室内の色彩の配合の感じのよささはがしい色は禁物にして、あらゆるものが透明な、穩やかなものであつた。

高い天井から垂れてる銀製の鎖に反射する灯の光線も、かなり厚い被ひにさへぎられてケバ〳〵しくはなかつた。

窓際の寢臺にまだうら若い乙女が凭れて居たが、レーセスターが這入つて來たので、彼女は半身を起き直り、靑いが美しい面を向けて、さも期待して居たと云ふやうな華やかな笑を浮べて彼を向へた。

『あなたでしたね、兄さま、私屹度左樣だと思つてました』

云ひ乍ら彼の頸に堅く手を廻して、燃ゆるやうな目で見詰め乍ら接吻した。

『まあ何て熱いのでせふ、下は大變だつた？』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『非常さ、まるで息が詰るやうだ、茲は涼しくて好い心地だ』
『ほんと？ 下では何をしてますの？』
『相變らずさ、唱つたり、舞つたり、騒いだり』
『兄さまも？』
『あゝ』と彼は投げ出す樣に答へた。
『だつて兄樣は外出なさつたそうじやありませんか』
『あゝ、チエスナツトを連れて一寸の間遊んで來たんだよ』
『まあ初めての日だつて云ふのに……矢つ張りあなたらしい事なさい升のね、だけど今晩はホントに好い晩でしたね。私此窓から日沒を見てましたの、あなたが出られるのを知つてたら見るんでしたつけ。牧場の先へ？』
『あゝあの牧場を突つ切つて……』
彼は暫らく默した後、しみ〴〵した聲ではなし出した。
「リー、僕はね、今夜幻を見たよ、君は別だけど、僕が今迄見た女で曾つてあんな美人はなかつた」
『さあ言へないね、君笑つちやいけないよ、女つてみんな左樣だから』
『若い方？ どんな風の？』
『そんなに奇麗な方でしたか？』
『そうだね、奇麗と一口に言へばそれ迄だがね……君覺えてゐるかい、何時だか僕バリーから送つてあげた美人の寫眞？』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『え丶覺えて居り升よ、丁度あんな方？』
『生き寫しと云つてもい丶位、想像してごらん、あの繪の女を――あんな風の女が出す聲、優しい、音樂的な、それで明晰した鈴の様な、そうだね一寸形容に苦しむね、まあ何の事はない魔法使の女が人を幽界にでも引き入れると云つたやうな……』
『レー々々　あなた今夜はまるで詩人の様な事仰しやい升ね』
『詩？　實際だ、好いことを云ふね、全くあんな顔、あんな聲は如何様な堅ん坊でも詩化して仕舞ふね』
『あなた堅ん坊でもないでせう、だけど其人誰なんですの？　何と云ふ名？』
『名はね、ステラと云ふんだよ、あの畫家のエテレージの姪だ相だ』
リリアンは目を見張つた、
『まあ、ほんとですか　レー？　私逢ひ度い』
こう云つた妹を見詰めた彼の顔には得意の色が輝いた。
『否え私止めやう、レー、あなた屹度明朝になれば其人を忘れて仕舞ふに極つてる、そうでせふ？』
暫らく二人共無言の儘互の強い視線を避けやうともしなかつた。彼女は急に兄の頸に手を卷いた。
『兄さま！　ほんと？　とう／＼時が來ましたねえ!!』
『何を云つてるの？　リー』
彼は何となく妹の答を待つのが恐ろしいと云ふ様な思ひで問ひ返した。
『……　レー、あなたね、最一度其方に逢つていらつしやいませんか、明日？　ね、行つていらつしや

いませんか？」

『リー、君らしくもないことを言ふね、今夜は？』

『えゝ、だけ共ね、私どうしても御進めしたいんですの、あなたは私には世界中で一番大事な方ですもの、ね、考へて明日いつて來て下さいな、あなたのためにも……あの方の爲めにも……』

彼は立ち上つて笑ひ乍ら妹を見下した。

『僕の爲め……には兎も角、彼女のためなんて……君も馬鹿だね、同じセックスの人はみんなお前と同じ樣にそんな偏愛的だと思つてるの？　會つたこともなし、先方の心も解らないで、そんな赤ン坊みたやうなこと云ふと思ふと可笑しくなるよ、ハ………』

『可笑しかありませんわ、ちつとも。……ね兄さま、あなたまだ御滯在なさるでせふ、私何だか希望が湧いて來た樣に思へます、兄樣が長い間求めていらつしたヴヰナスを探し當てたと思ひ升の、あなたの過去には私は幾度もそんなこときゝましても眞面目に御受け出來ませんでしたけれど、今夜ばかりは確かにあなたの目が光つて升わ、ね屹度明日いつてらつしやい。約束して頂戴！』

熱心極まる妹の顔を見詰めた彼は次第に靑ざめて來た、そして妹の前では曾て感じたことのない輕侮の念さへ、目にも唇にも浮んで來た。

『約束なんか出來やしないよ、リー』

と彼は言ひ切つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

枕屏風

生田花世

部屋は襖や壁のくりいむ色にたすけられていくらかほんのりと明るかつた。外には冬至に入つてから曇り續けた雪雲におほはれた空から霙まじりの冷たい雨がじめじめと降つてゐたので、空地の方でいつも喧しい子供達の毬遊びの叫び聲もしないので、忘れ物でもした樣な淋しさであつた。其方に向いた磨硝子戸の、毬が當つて碎けたところには白紙を線に切つて丁寧に張りかがつてある。皆の留守で獨り病の床に横はつてゐる加納そえ子が氣分のいくらか快い時にそれをしたのであつた。

加納は部屋の押入の前の枕屏風のかげで、眼を閉ぢたり開けたり、時には床ずれがして痛さうに俯向氣味に身體をねぢるやうにしたりして皆の樂しげな靜かな世間話に耳をすましてゐた。枕元には二三つの藥瓶と、これも氣持のよい時にしかけた造花の白い薔薇と紅いカーネーションと濃い菫とをあけびの小籠に入れて並べ、そばには材料の布や、繪の具や鏝を丁寧に重ねてある。その上には薄い埃が目につかない程にかかつてゐた。加納の眼は度々其の造花の花瓣の形や、葉の色合について考へてゐた。

加納は九州の女であつた。結婚の事で非常に反抗して家を飛出して、東京に來て、造花を習つて、もう活計の立つ程までに修業は出來てゐた。けれども彼女は高い抱負にいつも憧憬れてゐた。日本ではまだ其の色の永存の出來ない造花の染色に就いて、傳手を求めて外國に行つてそれを研究して來よ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うと云ふ事が彼女の望でいつもそれを口にするのであつた。かうしてゐても彼女は病もなほり、渡米する事も出來るといふ自信を片時も忘れる事は出來なかつたのである。

『何故赤い手絡をおかけにならないの。紫なんて本當に淋しいわ。』

聲の高調子な津根子は膝の上で、レエスで編んだ會員の皿敷――それは輸出向きのものであつた――の編み縮みをぐいぐいと引きのばしながら一しきり高く笑つた後で葉矢子に云つた。

丸髷に結つて紫の手絡をかけた葉矢子は、小さな手を火鉢の縁にかけながら默つて笑つてゐた。

『赤い手絡は少し年の行つてる人でもさう惡くはないわ。今度はさうなさいよね』

救命びんを火鉢の火の上にかけて、あたためてゐた勝子も面白さうに後について云つた。

『でも私は淋しくしないとうつらないのよ』

『だつて旦那樣がお若いんぢやありませんか』

『私もずゐぶん長い間紅いのをかけましたわ』

勝子は津根子の後からまた繰返した。さうして自分の其頃の生活に思を走せるやうな眼付となつた硝子の救命びんはだんだんと暖かくなつて行く。

勝子は津山の女であつた。十六七の頃嫁入りをして五年もゐた夫の家を出て、かうして獨り東京に職を學びに來たのはそれには深い紛糾はあるのであつた。けれども彼女はそれを誰れにも語らなかつた。唯、夫とは相愛の仲でも、子のない事や、姑のむづかしい事で家に居られぬので、自活の道を求めて身の落着を立てようと思ふからと彼女はいつも云つた。けれども獨身の人の多い此の家の中ではぢつと心に祕めてゐるのであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勝子はマッサアジの修業を始めてゐた。そしてもう師匠のかはりに氣安い家々へ出稽古にゆける位にはなつてゐた。一日に七人もの身體を揉むと歸つて來ると身體の節々が恐しい程凝るのであつた。此んな時彼女は中に水を入れた扁平な救命罎を溫めては方々の關節にあてて自分でマッサアジをする。

枕屛風のかげで加納が淋しい低い咳をした。それで三人は不圖默つた。其の跡がななめに紡のやうに黑く見える。

『加納さんどうですか。氣分は』

葵がさらさらと磨硝子をかすつていつた。

薬矢子はそれまでは寢てゐると思つてゐた人の咳に、起きてゐるのを知つたので、かう聲をかけた。

『有難う。相變らずですわ』

と加納は自分で勵ますやうな強い聲でいつて青白い手をのばして、枕上の造花の熳を向方に押して藥瓶を手に取つて、身體をすこしもたげて、ごとごとと振り始めた。

『加納さん、お藥なの』

『ええ、少し飲みおくれちやつて』

と加納は脹れたぶよぶよした顏をもたげて暗い鈍い眼で傍に來た津根子を見上げた。

『お國からお手紙なのよ』

と津根子は厚い手紙を、加納の手に渡した。

『有りがとう……』

加納はそれを手に取つたけれども、凝つと差出人の名を見詰めたきりで、落して了つた。そして藥

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

をごくごくと飲んで、元もとのとほりそつと横になつた。

加納の病氣は皆なには惡く思はれてゐた。そして加納がいふやうに淋巴線が腫れるだけではないと思つてゐた。全く加納の病勢は段々肺の結核にすすんでゐるのであつた。手紙は國の兄から久し振りに來たものである。彼女には其の書き送られた内容が見え透くやうに分つてゐた。それは歸國して、義理ある家との婚約にそむかないならば、歸國の旅費を送り、今後の世話もする。けれども猶反抗して東京でゐる限りは金を送る事は出來ないと此前に云つて來た父の手紙と異つた意味のものとは思はれなかつたので。

だが、死んでもそんな事がどうして出來よう。親も愛はない、兄弟も優しくはない、誰も皆自分には冷たい。あの嫌な心のあはぬ結婚を今更するならば今迄の苦心は水の泡となつて了ふ。造花で私の活計はもう立てられる。こんな世界中にかまひてのない自分は矢張り自分が處置しなければならない。今に私の忍耐は現れる。今に病氣もなほり……さう思ふと彼女はほろりほろりと涙をこぼし泣きじやくりしながら、渡米の夢をうつらうつらと描いて眠りはじめた。

『きれいな白い薔薇！』

葉矢子は枕屏風の薄暗にくつきりと見える籠の中の白い造花を見てかう呟いた。

『加納さんがなすつたの』

加納はうとうとしてゐた。

此聲がふと心をはつきりとさせたので眼を開いて、葉矢子の顏を見た。丸髷の根が少しあがりすぎてゐると加納は思つた。そして淋しく笑顏を見せて、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『葉矢子さんにそれ差上げますわ』
と弱々しい聲でいつた。
『薔薇を』
と津根子が訊くと、
『菫も』
と云つた。
『そしてあの籠に入れてね』
と仰臥しながら部屋の隅の棚を指差した。そこには筒形の小籠が五つ六つあつた。
『まあ、有り難う、加納さん』
と葉矢子は喜んで禮を云つて、その籠を手に取つて好い具合に白と紫の花をいけた。
加納はぢつと見てゐた。そして、
『淋しいのね。紅いのがないから』
さうして津根子に
『簞笥の中に紅いのがあるのよ』
と云つた。
津根子が桃色の大輪のを一つ出して來て、中にまぜた。花籠はそれで艶やかになつた。部屋はもう暗くなつてゐた。
それで、勝子は肩骨に當ててゐた救命びんを机の上に置いて、高く吊り上げてゐた電燈をおろして

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其れを振つた。ぱつと一杯に黄色く明らんだ。津根子は紫のめりんすの風呂敷で、病人の方にゆく光を包んだ。病人は眩しいといつも云つてさうさせてゐたのである。

津根子も勝子もよく世話をしてゐた。

歸りの遲い外の二人の女はまだ歸らなかつた。豆腐屋の笛が陰氣にひびいて來た。葉矢子は病人にもう一度禮を云つて歸らうとした。けれども加納はもうすや〳〵と本當に寢てゐた。

『起きたらどうぞよろしく云つて下さいね』

彼女はかう頼んで外に出た。

白い雪が降り出して、町の屋根は仄白くなつてゐた。年の暮れの寂寞がどこにもひそんでゐた。葉矢子は傘を前に傾け、造花の籠を持つて泥濘を避けながら急いで歩いた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

林泉集をよみて

山田邦子

中村憲吉様

御新著林泉集を頂戴いたしまして誠に有難う御座いました。御目にかゝつてよりまだ日も淺い私がかうして書簡などを發表いたしますのはいかにも烏滸の業で御座います。私はそれを思はぬでは御座いませぬが、かういふ形式をとつて書かないと、書けない所が御座いますので此形式をとる事に致しました。

御作に對して深い敬意と愛好を持つてゐる私は、此度の御歌集の御發行を、かげながら大へん御待ち申して居りました。久保田先生よりわざ〳〵御送り下された時には實に有難く思ひました。暑い夏のうち、此集を御出版になるについて、いろ〳〵と御苦心をなされたり、又おせはしい思ひをなされた事が、今更に思ひ浮べられて更に感謝の念をまさせられました譯で御座います。

御集を心靜かに拜讀して、私の心に刻された深い感銘を私はどういふやうにこゝに現していゝか、それは私にはなか〳〵の難事で御座います。私が心に感ずるまゝをこゝに述べましたらば、又うるさい人々は、おもねつたる言葉として笑ふかもしれません、それを思ふとなんにも申したくなくなります。然しさういふ者は要するにさういふ者、私は私ですから眞心を以つて信ずる處を書いて見ます。

こゝで私は一つ御詫びを申し上げなければならぬ事が御座います。それは彼のアラヽギ叢書第一篇として御發表なされた、久保田先生と合本の、馬鈴薯の花のお歌についてゞあります。私はアラヽギ派(?)の方の御歌を拜見したのは、そも〳〵あの歌集が始めてゞありました。さうしてそれは久保田先生のお歌であります。先生とは國を同じうし町を同じうしてゐながら、お名前だけは存じて居りましたが、御目にかゝつた事もなく又御作を拜見した事も御座いませんでした。或る時ゆくりなく友達から借り、彼の馬鈴薯の花を拜讀する事が出來て私の感動は我れながら其深いものであつたのに驚く程で御座いました。私はくりかへし〳〵幾度馬鈴薯の花をよんだか分りません、それがいつも〳〵久保田先生のお歌ばかりで御座いました。

其後先生とお近づきになるやうになつてから先生より中村君の歌の力も是非一讀されるやうに、君の歌は派手に人目を引か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ないけれど味ひの深い歌であるといふ事を幾度も〲伺ひました。私もさうしやうと幾度も〲思ふのでしたが扨馬鈴薯の花を手にとるとどうも久保田先生のお歌を又よみたくなつてしまつては、さうしてしまふのです、時には初めの二三頁を拜讀しはじめた事も御座いましたが、どうも先生のお歌の方がよくてとう〲拜讀しないで幾年もたつてしまひました、誠に申譯ありません。

私が御作を心から拜讀いたすやうになりましたのは、私がアラヽギに入會した後の事で御座います。

かういふやうで扨心から靜かに御作を拜見するやうになつてから私は回を追ふて深く御作に心動かさるゝ一人となり、彼の磯の光、馬柵の霧等の一部を御發表なされた頃には、御作といへば幾度ともしれずくりかへし拜讀して味ひしれぬ有難い心にうるほされました。これは一面から言つて久保田先生の御教導によつて、幾分なりとも眞實の歌の價値といふものを味ふ心を育てられた賜である事は申すまでもないと存じます。

此度林泉集を頂戴して、私は更に此感を深くせられました。私は百千のいゝかげんな、粗雜な書物をよんだよりも、此度の林泉集一巻を拜讀出來た事を有難い事に思つてゐます、殆んど一首一首、磨きこまれた珠のやうな光をはなつてゐるのに感じ入らせられたのであります。未熟な自分などのまだ口にするべき事ではないかもしれませぬが私の直感として、久保田先生の御歌が彫刻ならば、御作は音樂であるやうに思はれます。先生の御作に陰影となつて現れてゐるものは御作には響となつて現れてゐるやうに思ばれました。靜かにして。しかも豐なる一巻の味は、まれにしか得られぬ實玉の價であると思はれました。

私はあらためて馬鈴薯の花の御歌を、此度久々で拜讀して見ました。さうしてそこに、馬鈴薯の花に芽ぐんでゐた光が、すが〲しい清光をはなつて來た事を思はせられました。あの頃の御作では、まだ充分に磨きこまれない爲に、未熟なものには其價を見出されぬ所があつたやうに思はれます、此度の林泉集に至つてまさに目に見えて其光が底からきらめき出した感が深う御座いました。

人それ〲の境遇から申せば、肉身の愛を身にあまり受けて週圍から來る或る種の苦い思ひを割合にお受けにならないらしい。其意味で幸福なお心が生んだどこまでも上品なお歌は、自分の心にぴたりと來るといふよりも、暗い心の底に求め慕つてゐるなつかしい音樂を聞かされたやうな、味を味はされました。それ故に私は御作として、向日葵、櫟の道、緑陸製薬等のお作よりも、磯の光、青蟲の夜、星の尾、四日月の光、馬柵の霧等を更にはるかに愛誦いたします。そしていたましい自分の心に水晶の珠數の響がしみこんで來るやうな思ひをさせられます。終りに御作のなかゝら左に少しばかりあげさせて頂きます。

　岩かげの光る潮より風は吹き幽かにきけば新妻のこゑ

　短か世の妻と思へばうら愛しひとりの時の涙しらすな

　磯をゆくひまだに母はあはれなり我が新妻を愛しみ給へり

　島山を下ればさみし隠り江のむかうに暮るゝふかき松山

　離れ島磯わにのころ夕光かつがつ妻が言惜しみける

　青き露ちかく流れてわが息の長息にふかく慣れがたきかも

　宵ごとに星美しくなりにけり尾を曳く星のしきりにあはれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

街なかの埃しぬぎて來るらん光りつかれて居る雞はも

塀の上に現つに光りくろぐさ蹲ふさく鳴かざる雞

塀の上に春日が霧ればうらかなし啼きたる雞ひさしくは居す

鶺鴒の啼く音なきゝぬ日のくれに浦回急げばくらき岩間に

倉庫並の塀のおくがへ夜ごもりに入り行く船の水棹の音

おもむろに磯におちたる浪の音ゆふ凪ぎ海の潮のふくらみ

おなき星水田のそこに搖らぎつゝやゝ冷めきし風ふき來る

おく山の馬柵戸なくれば霧ふかしいまだ咲きたる合歡のうす花

霧らひつゝ草にこもれる水のおと草にはゆらぐなでしこの花

朝鳥はいまだ啼かれど霧ふかき山にはすでに人の居るこゑ

松の間に秀村の霧はくだれども人ごゑ深し草のおくがに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ビアトリス社詠草

吉田玻瑠子

丘にきてはろ〴〵空を見渡せば貧しき者は我れのみと思ふ

朝夕の厨に立ちて默しをればはたちの日日に戀はなかりき

まぎらはしまぎらはしきてついに今日打ち明けられぬ君に泣かれぬ

幾すぢかからみ合ひたる落がみにふとさそはれて涙さしぐむ

袷せきて浴衣の糸をほどきけり又綿入れを縫ひぬ女は

小萩散る夕裏木戸に佇める姉に一言(ひとこと)何か申さん

絶え〴〵の虫をきゝつゝ厨にて錆び庖丁をとぐは悲しき

都とぞ云ふには淋しき月島よ秋ゆく頃の波の悲しさ

渡場(わたしば)の木棚により雨をみつゝ物思ふ夕べ秋はゆくかな

雨の夕渡場にきて佇める我れをいぶかる渡し守りかな

秋雨のそゝぐ與下の渡し小舎今宵ばかりは淋しくみるは

今は早冬着縫ふ手は文かきて君に送らんひまもあらなく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

倉津鳴矢子

人は人我は我とて夏山を一人しゆけどなぐさまぬかな

ほとゝぎす聞くもうれしや只一人夜更けの床に眠られぬ夜は

ひんがしの山の上なる夕立の雲みてあれば何かさびしき

あゝ夏は古き壕にも浮草が青々として漂ふものか

長谷川梅子

さみだれに輕くうたれてひるがほが一つ咲きたり君あらぬ家(いへ)

吾れわきて淋しむ事と怒る事はげしきさかに生れしものか

太郎山峯に白雲わきのぼりさやかに影を落とす秋のひ

桑畑に蒔きし秋菜の青やかに光れるそばを水流れたり

今來にし畑のこみちを荷かづきて歩ゆみ來たれる又一人かも

秋風に吹かれて歩む我が歩み遂に畑の中に入りけり

小泉くに子

いらへなくほのかにゆるゝ後れ毛を涙のひまに見つめたるかな(敎へ子を叱りて)

さとさんと其半ばだに言ひもえず兒のいとしさに共に泣きけり

新わらの香りはゆかしもみすりの音ごろ〳〵と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ひゝけるなかに
ちらくと稲かる人の手拭は夕ぎりのなかに動きてやまず
山里は静かにくれてぼつかりと鎮守の森に出し月かも

石井俊子

コスモスに秋の想ひを通わせて一夜(よ)ありけり思出の窓
秋雨にふるへる心しかすがに汚葉(くちば)の匂ひなつかしむかな
此一日峰の紅葉なつかしみ夕日の中に人を思へり
秋雨は寂しく降れりかゝる夜に庭のコスモス花散るらむか
秋風はつめたく吹けり花におく露うつくしくなりにけるかな
秋來れば白てふ小さく咲き出でし古里の家の忘れかねつも

英美子

晴天鶴

雲晴れて日かけうらゝにさしのぼる千代を響き田鶴なきわたる

折にふれて

胸の中誰に語らん友も無し淋しげに咲く秋の八千草
みたよりを今日か明日かと松風に今日かも散りぬ桐の一葉

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

會員欄

◎若人の死

英

入つて見ると、そこにはそこで丁吉の思ふ様にならないことが少くはなかつた。どうしても丁吉は正直すぎる。

好い加減に胡魔化してすまして居ることが出來ないで、得心の行く丈け仕て仕舞はなければ氣持が惡い。それで一つごとに熱心は熱心であつたけれど、それ丈けまた自分の意にはまらぬことを仕なければならないことは、人一倍不愉快を感じて自然捗どらないのであつた。善いといへば善い様な、惡いと云へば惡い様な丁吉の斯うした性質はどうしても利益だとは云へぬ方だつた。

併し丁吉はつまらないからといつて、まるつきり何も仕ないで暮すといふことは出來なかつた。それ丈けの餘裕がないのであつた。あるにしても丁吉はそんな張りのない日を暮すことはいやであつた。

あんまり壓制的で、あてがはれた仕事を只すればよい、いはば器械になつて働けばよいので自分からはたらく部分のごく少ない前の仕事を捨てゝ、今度の所へ入つたのであつたけれど、どこでもさう思ふ様にうまくは行かなかつた。それかといつてあてもなしに直ぐ飛び出すといふことも今の丁吉には出來ないので、他に口がないうちは矢張いやでもかぢりついて居なければならぬ。

それが丁吉はたまらなく不愉快であつた。

そのとばしりが何も知らぬとよ子への手紙にも時々はとんだのであつた。

想ひ想はれて居ると、確く信じ、又、想ひ想はれて居る事が一番幸福で、その爲にはどの様な悲しい事でも、苦しい事でも消されて仕まふものだと思ひもし、實際色々ないやなことも丁吉を想ふ時は忘れて仕舞ふことの出來るとよ子には、丁吉の手紙の端々にあらはれる冷たい様な、悲しい様な抽象的な言葉は、どうしてもわ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けがわからなかつた。そしてその樣な悲しい言葉の出るのはどうも、自分が丁吉を想ふだけ丁吉が、自分を想つて居てくれないのぢやなからうか、自分を想つてくれることが、又、想ひ想はれるといふことが自分と二人であるといふことを幸福に思つてくれる度が薄いのぢやなからうかと、思はれて來て、それが大變に物足りなくなつた。それで時々そんなことを書いては悲しがるのであつたけれど丁吉はいつも笑つて、『男のこんな愚痴を、女のあなたにお話しするのぢやありませんでした』といつてしまふのであつた。さうすると又、そよ子にとつては『女のあなたに話せない』といふのを遠慮、かくしだて、の樣にも、とつて見て、更に水臭いと思つてはくどき書くのであつた。

そんな時は丁吉も手のつけ樣が無て困つた。どんなにいつて見てもこんなになるとわからせ樣がない。さうかといつて一々具體的にこんなことが不快だとか、あんなことがつまらないとか、書いて見せられるものでもなかつた、そんなに一つ一つこれがあれがと指させる樣にはつきりしたものではないのだから。『やつぱり獨りだ。一人で苦しみ悲しまなければならないのだ』と感じるのであつた。

そよ子の方から急いでゐる結婚の事もこんな氣持でおくれ／＼するのであつた。結婚するとなると一家といふ者が、のしかかつて來る。よくある物質のために氣まづい思ひをするといふ事がいやである。そんなことをいふ度にそよ子は眞劍になつて、『二人が一緒に苦しむのならたとひどんなにみじめな生活でもいゝ、どんなことでもして見せる。』と、いふのであつたけれど、丁吉はやつぱりほんとの幸福といふものはそよ子のいふ樣なそんなことばかりでは得られない樣に思へた。そして、又、後の重荷の爲に自分の仕事といふものに弱いところが出來て尙一層不愉快を忍ばねばならないことがいやであつた

たとへそよ子がどんなに書いても、それはもうどうしても一人の今に比べて手輕に動けなくなることは知れてゐた。

併しさうかといつて、『もうこれでいゝ』と滿足する樣な所も、いつ、どこにあるといふあて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もない。こんなにしてつまらなく暮さなければならないかも知れぬ。丁吉にしても、この物質といふものに心配がないのだつたら、今でもそよ子のいふ通り結婚してもよい、決していやだといふのではない。心を生かすといつしよに身體をも生かさねばならぬ。男は、二人の身體を生かす料を造らねばならぬ、女は男を思へばいゝ。男は女を思ふだけではすまぬ、生かさねばならぬ。

丁吉はその荷の重みを少しでも女に負はすのは何だか男の意氣地がない様でいやである。ずつと先きの先きまで考へて行くと、かうなつて、かうなつて、とおしまひまでの豫想がついてしまふ。さうとすると、もう何も生きて行く用もない様に思へて來る。

もうどうなつてもいゝ、盲目滅法に構はず結婚してしまつて思ふまゝな所をとび歩いて、何にも拘はらないで、自分の思ふ樣働ける樣な仕事を探さうかしらとも思つた。

かうしてどうとも決しないで、あちらを考へこちらを考へてゐた丁吉は急に病で五日もねないで、そよ子をおいて逝いてしまつた。

（評　輕いユーモアのある、何となく考へさせられる作である。）

小春日和

平間民子

温い日光は、南向きの椽側に腰かけて、編物して居る、貞子の膝の邊まで照つて來た。

「お繁から時々は便りするかね」椽側から三間許り離れた畑に菜を引いて居た貞子の伯母は、兩手に菜を抱へ作ら、貞子に近づいて尋ねた、

「いゝえ、ちつとも、だけど七月に飛行機見に行つた時に會ひましたよ」といつて、始めて顔を上げた、貞子は日向に立つて居る、伯母の目の周りに、澤山の皺が見えたのに、少からず驚いた。

「どんな風をして居たかね」

「どんな風つて、丸髷に結つてヴエールを肩にかけて居らしたわ、娘の頃よりは餘つ程奇麗に見えましたよ」

「ふーん、それではあの頃だらう、松井の兄さんと一緒ぢやなかつたかね」

「えゝ、一緒だといつてらしたわ、だけど私と會つた時は一人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でしたよ」
貞子は其折の繁子を思ひ浮べた、堅縞の年の割には派手なお召を着て、土煙のひどい觀覽場を草履ばきで歩いて居た、僅か裾をかかげて居たために白い地色の長襦袢が、見えて居た事も思ひ出した。
「此頃は子供を伴れて又歸つて居る樣だよ、此度で三度目だからね、飛行機見に行つたのは二度目に歸つて居た頃に相違ないよ、松井の夫婦が何んでも話をつけるとかで、來て居た事があるからね、昨日、一寸本家に行つて今日こちらに留守番に來るんだといつたらね、おけいさんがしきりにお前の事を聞き度がつて居たよ、それからお前の亡くなつたお母さんの代りにどんな人が來たか、とかね、お前が氣の毒だともいつて居たよ、だけど自分の娘の方がなんぼ氣の毒か分らない、と、いつてやり度かつたよ、おけいさんも負け惜しみが強いからね、お繁の歸つて居る事についちや、一言も云はないんだ、けれども、氣を痛めて居る事は知れてるよ、自分所が都合よく行つてる時には、お前の事なんか聞かうともしないんだからね」
本家と新宅と二軒とはいふものゝ地面續きでもあり、土藏などは外から見ては、どちらのものか、解らないほど接近して住み乍ら、何時も伯母と本家との間には、お互ひに反感があつた。それは伯母の弟は、男だといふので本家の後を繼ぎ、伯母は姉であるのに、すつかり絶えて居た新宅を繼がなければならなかつた、本家は地方で指折りの財産家であつた、けれども、新宅には少しの田畑が殘つて居る許りで、伯母が後繼に定つた時に、僅かの物を本家から別けて貰つて、養子を迎へたのだつた、それでも伯母の母が生きてる間は本家をまるで自分の家の樣にして居たのが、弟嫁の世になつてからは「お味噌の加減も見せない」といふのが伯母の反感の原因だつた。
亡くなつた貞子の母とは唯二人きりの姉妹で、六里許り離れては居たけれども十日目位には屹度どちらからか使を出したり、自分等が往來したりして居た、貞子の母も新宅へは行つても三度に一度位しか本家には顔を出さなかつた、それがために本家とは遠くなつて祝儀とか凶事の外はめつたに物品の取り遣りもなかつた程だつた、貞子と、本家に生れた繁子とは、二人きりの從姉妹で、繁子の方が一つ年上だつた、貞子は尋常六年を了ると直ぐ、京都の府立の女學校に入學した、それから間もなく繁子が同じ京都の私立の裁縫女學校に入つた、といふ話を聞いた、繁子と貞子とは繁子の卒業する迄の三年間を、同じ地で學んで居たのだつたけれ共その間に唯つた二度、貞子が繁子を、その寄宿舍に訪れて行つた丈けだつた、その二度の會合も貞子が會ふ迄抱いて居た樣な、懷しいものではなかつた、再び行くまい、と思はせる樣なものだつた。
繁子より一年おくれて卒業した貞子はその卒業した秋の初め頃突然繁子から手紙を貰つた、そして、其後伯母の家で久しぶりに二人が會つた、其時の繁子には得意の色が溢れて居た、それは繁子の母の實家に私立大學を出た正己といふ人があつた、其の頃は姫路に一年志願をして入つて居たが、除隊になると直ぐ繁子と結婚する約束が成立したといふのだつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其後繁子と貞子との間に二度手紙の往復があつた。其間にも伯母は來る毎に「お繁の此頃」を話して居た、結婚の日取も略定つて、此頃は仕立屋が二人入つて居るとか、京阪に衣裳の買ひ出しに行つたとか、

それ程に準備して居たのに、俄然破談になつて、正己には播州から嫁が來てしまつた、伯母も「よくは解らないが顔が惡いから正己さんか厭になつたに違ひないよ、今になつて急に從兄妹夫婦がいけなくなる、理由はないものね、變だよ」といつて居た。

其頃から、貞子の母は胃腸を痛めて、遂に十八になつた貞子と今は東京の會社に勤めて居る貞子の兄とを、殘して死んでしまつた、其後貞子の頭には繁子の事は殆ど無かつた、伯母も話さなかつた、それから三ヶ月許り後に、貞子の繼母が來る樣になつて、以來伯母も餘り來なくなつた、來ても繁子の話をする程にゆつくりして居なかつた。

それから、一年程たつた、五月頃始終貞子の家へ雇はれる植木屋から「上村のお孃さんは、たうとう御新造さんの御里の方に定りましたそうですね」と聞いた、どうしたのだらう！繁子を斷つて、播州から貰つた嫁は、どうなつたのだらうか、と不思議でならなかつた、どうせ知らせて來るとは思つて居たが氣に懸つて居た、たうとう伯母がやつて來た。

「今になつて、從兄妹夫婦がよくなるのもおかしいね、だけど前の嫁の當て附けで、早く貰はないと、具合が惡いので定つたと見える」と伯母は、破談になつた時にけなしたと同じ口調で批評した、伯母の話では正己が入籍して居る間に關係したとかいふ女が幾度も會ひに來ると、いふ理由で、まだ子供の無いのを幸ひに嫁の方から強いて離婚をしてしまつた。それから四日目に繁子との話が纏つたのだ、といふ事だつた。此の話を聞いた貞子はあつけにとられて、何ともいふ事が出來なかつた、そして、此度繁子の身にも不幸が起つて來そうに思へてならなかつた。

「行き度くつて、行き度くつて、親もやり度くつて、やつと思ひ通りになつたのだから占めたものさ、これ迄他から話が有つてもやらないで居たのが幸ひになつたよ。だけど、話の行きかゝりが面白くないね」と伯母は附け加へた。

繁子の結婚後一年餘り過ぎた同年の七月、貞子が會つた時に女の兒を設けたといふ事を本人の口からも聞いて居たけれ共、其時の態度には別に不幸な影も見受け無かつたと、貞子は思つた。

茶を持つて家に入つた伯母は再び出て來て、貞子の傍に腰をかけて獨り話し續けた。

「何でもその女が此頃は隣り村に圍つてあるそうでね、一ト月の內、三日位しか正己さんは家に居ない人だそうだ、昨日も家で話して笑つたが、此頃は何といふ頭か知らないが、まるですき髮の樣な具合に、前を引き詰めてさ、頸筋の方に髷を拵いてるがね、あれぢや正己さんも愛想か盡きるだらうて、いくら藝者の向ふを張るつもりでも駄目だよ、あの髮にあの顔ぢや、そこへ持つて來て、白粉を壁程塗つてるんだからね、落ち込んだ目が氣味が惡るいよ」

伯母の口に會つちや堪らないと貞子は思つた、けれ共、滿更伯母の批評も惡口許りでもないと思はれた、虛榮心が強くつて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

どんな低い者であらうとも、自分の周圍の者とは何によらず競爭して、勝つたと思つて居ないでは居られない性質で、其のくせ何處か間拔けた、活氣の無い態度や、物言ひは誰にも不快に映るにちがひないと思つた。

七月に會つた時の見えを張つた態度といひ、又實家に歸つて居てもなほ女優卷――多分そうだらうと想像した――に厚化粧をして居る姿を思ひ浮べて、傷々しい氣がした、そして遂に貞子は伯母にいつた。

「もうお繁さんの話は止めましやう」

貞子の顏の邊まで照つて來た日光は、ぢつと編物許りをして居られないほどまぶしくなつたので、膝の上に編物を置いた儘、何時迄も畑に遊んで居る鷄を見守り乍ら、考へるともなく繁子の上を思つて居た。

（評述者を絆です、一通りお繁さんと云ふ人の輪廓が現れてゐます。）

最後の笑

常　子

「道代。ほんとなの？ 中田さんが訪れて來たつて。」

今、庭先で爺やが、そんならしい事を吃りながら話して聞かせたので、淳子は玄關に迎へた道代がまだ頭を上げぬうちから、かう、いら／＼しげに尋ねるのであつた。

「はい、あのお嬢樣が、さつきお琴にいらつしやいますとちきのことで御座いました。」

「……」無言の儘に二人は淳子の室に入い

「あの何でも、是非御目にかゝりたいんだけれど御歸りをお待ち申すわけにも行かぬから後程又お伺ひ致しますつて」

「あの人よく來たもんだわ、うちへなんぞ、それで、どんな樣して？」

「どんなふうつて！ 御嬢樣道代は全くわかりません位で、まあお可哀相で……」

物慾しいこの道代に後姿のそつくりな、そして、あの中分程もせめてと羨んだ髮形さへ見る影もなくやつれたといふからには、どんなに變つたのだらう。そゞろ好奇の心も手傳つて「遇はふ」と道代に含めて置いた。

淳子は、一貫張の机の前にどつかり座つて道代が話した中田のことを考へて居た。

あれ以來、葉書一本交してゐなかつた、しかも停留所から小半里もあらう自分を、どうして訪れる氣になつたんだらう？ 又出直される道でもないものを、一體どこに、どんな用を足してゐるのだらう？

淳子と中田百枝とは極く親しい友達だつた。△△女學校の一年から卒業まで「ほんとに離れられない姉妹のやうね」と羨まれもする間柄であつた。淳子の方が一つ年上であつたので中田は淳子に姉樣々々と慣み、淳子は又百ちやん々々といつて中田を愛してゐた。

「あなたは何時までも私の姉樣でゐて下さいな」と中田は送別

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

會の夜に、ほろ〳〵と涙をこぼしてゐた。淳子も「えゝあなたも私の百ちやんでね」としつかり手を握り合つて、かりそめの別を誓ふたのであつた。

二人が三年であつた頃、一高を出て帝大へ入學(はいつ)た許りの久野さんといふ方があつた。すぐ隣室に下宿してゐた文科生！

二人はよく遊びに行つた、淳子は文學の質問にも行つた、凛々しい口元、一文字の眉、淳ちやん〳〵と呼ばれる度、氣の遠くなる程に想(おも)ふてゐた其久野さん!! 未來の文學士の夫人に、百ちやんの中田さんがなつたと廻文で見た時、淳子は泣いて〳〵泣きあかして、中田をうらんだ。

えゝ純白導と思つた百ちやんは、この私をひそかに咀(のろ)つてゐたのか？

よゝそうぢやなくつとも私の久野さんを惜しむ情からいつても殘酷だ、えゝ口惜しい。中田百枝樣と宛てた皮肉つた祝文一枚送つたぎり、それぎり絶交してゐたその中田さん！ 何しに來たものだろう？

けれど忘れやう〳〵と憎む自分を僞りにも慕ふて來る丈、いとしいやうな氣もする。

水銀のやうな重い夕の風が、淳子の倚れるカーテンを煽れば、櫻もみぢのはら〳〵と散る。櫻もみぢのはら〳〵と散る。まだ室までは踊らなかつたらしい道代が、中田さんが見えたと知らせて來た。

淳子は、とにかく玄關まで行つた。

蒼白い頬にさらりとほつるゝおくれ毛を、右手でそつと掻き上げるのが昔のまゝの百ちやんを偲ばせる。

淳子は六疊の應接室へ通した。

しばらく無言の瞬間がつゞいた後、淳子から「今はどちらにお住ゐですの？」と聞へば、

「あのやつぱりあの!! △△館の二階ですの」となぜか罪人のやうな弱みを見する。

道代が運んで來た茶菓をすゝめてからまた新たに話しかける。

「もう來年は御卒業ね」

「えゝ、ですけれど困つてゐますんですの」

「でも御卒業なされば、もう學士さんですもの、まあ御めでたう御座いますね」

「道學が出來る位なら、よう御座いますけど」

二人の瞳は、ぱつたり合ふ。

庭の松林の間をコソリ〳〵と何か這ふて來るやうな淋しい音がする。

「では只今どうかなすつていらつしやいますの？ 御病氣でも？」

「はあ……」

重苦しい息を二三度肩でした中田は、ぽたりと涙を落した、漆々と夕暮は二人に迫る。

「まあ……で今日あたりは」

又涙をぽたりと落して「今日は妹が來てゐますので……子供もそれに預けて來ましたの」

淳子は子供と聞いては、考へずには居られなかつた、これが昔の百ちやんだろうか？ これが三年前、姉さまと呼んでゐた中田さんかと疑はずには居られなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

淳子は、泣いてる人を、じつと見おろしたが、それは中田か師人か？　たゞ一つの影を黒く止めてゐる丈で、それさへ淋しさを産む塊のやうだつた。

中田は、きぎれ／＼に、たつた一人のお母さんから、絞れる丈しぼつて彼が學費に足したこと。彼が色酒の味を覺えて、めつたに歸らなかつたこと、つひに悪疫に傳染したこと、その中に自分が子供を産んだことなどを話して悔いてゐた——誘惑されたのを——

戀敵？　戀敵！　心の一隅で叫ぶけれど、淳子は何とも言はずに中田の肩に手をかけた。

「昔の姉様ゆるして下さい」かういつて、あまへるやうに淳子の面をうかゞひ乍ら、中田は立つた。

「お久しぶりですから泊つても戴きたいのですが、何しろ御病人と赤ちやんを控へていらつしやる貴女を、さう何して、また失禮ですから」と淳子はいつて、「では又久野さんの御氣分でも癒つたら、御揃ひで御出かけ下さいましな」と晴れやかに言ひ足した。

幾度か中田の辭むのを、淳子は道代をつれて停留所まで送つてやつた。

途中も中田は、「すみませんわれ」とくり返してゐた。

まだ△△行は來ない。

街路の電燈のみいたづらに華にして！

中田は又云つた。

「おわびに來たのよ淳子様ゆるして下さること？　姉さまは昔のまゝでゐて下さいますけれど、私が、私が、こんなに變つてしまつて……すみません」

「そんなおわびなぞいるものですか」

「これから先も、いつまでもあたし變らずにゐますわ」

と云つた淳子の顔には、いひ知れぬほこりがきらめいてゐた。

一番後の車窓から頬のやつれた中田の顔がいつまでも見えてゐた、

どこからか脊く膨れた男の顔がぬつと出て幻のやうに中田の顔を掩ふやうにも見えた。

中田の顔の見えなくなつた時、淳子は胸の空いたやうな安堵を覺えて、道代を顧みて、につこり笑つた。——完——

（評面白い處を覗つてあるやうですがもう一息とおもひます）

新刊紹介

歌集林泉集　中村憲吉著

アラヽギ叢書第六編にして、大正二年より五年に渡る短歌五百六十一首を集めたるものにて、本誌に山田邦子讀後の感想を發表す。平福百穂氏の筆になる四色版夕川の馬及び蟲田川に、湖の女の寫眞版入（定價九十錢送料八錢小石川區上富坂町廿三アラヽギ發行所）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

編輯だより

■私達の大切な「ピアトリス」はおかげで丈夫に二つの年を迎へようとするまでに續いてまゐりました。これからも益々皆で絶まぬ強固な愛で支へてゆく決心して居ります。それで維持會もこしらへたり、無意味でない範圍内で其他の種々な企てが幹部の間で相談せられて居ります。以前の女流作家追慕會は靜かな感じの好い會でありましたし、世間も亦それをよく受取つたのは事實です。來年も亦あの時分にするやうにして年々續けたらばと思ひます。

■十一月の間に杉浦翠子さんと、五明倭文子さんとが、退會を新聞で御發表になつたやうでございます。會の方へは唯御一家の事情からとの御話です。お二人とも最初から大變熱心に又誰れよりも骨折つてピアトリスの談話會や、追慕會に盡力して下すつたので、私共は心から感謝いたして居たのです。けれども御事情があつて見れば、強いてお引止めする事も出來ず、お別れする事といたしました。そして其間に毫も不快な事のなかつたのを皆樣に喨きり御知らせいたして置きます

■神近氏大杉氏の自由戀愛事件批判の論文で、今月號は賑やかなので、内部の人々は喜んで居ります。尚今後も問題があり次第、充分に一同の意見を發表するやうにしたいと云つて居ります。

■ピアトリス創立當時の發起人や社員の顔觸れ等が多少變つてまゐりましたし、杉浦翠子氏、五明倭文子氏の退會の爲め幹部の方でも人か少なくなりましたので、今回新たに相談の上左の十人がピアトリスの編輯及び經營に全力的の努力を盡しその全責任を負ふ事といたしました。左樣御承知下さいまし

山田　邦子　岡本かの子　坂本　眞琴
岡田　幸子　原阿　佐緒　齋賀　琴子
久保田富江　小林　鈴子　生田　花世
山田　たづ　（順序不同）

■ピアトリス社維持會、ピアトリス社では社の基礎を經濟的に確固にする目的で、今回ピアトリス社維持會と云ふものを設けました。維持會には甲種と乙種の二種あつて、甲種は毎月金一圓づゝを收むるもの、乙種は毎月金五十錢づゝを收むるもの、いづれも期限は一箇年で、尚期限後甲種は二箇年間雜誌ピアトリスの寄贈及び、其期間中に出版したる圖書の寄贈をするものといたします。又乙種は期限後一ヶ年間雜誌ピアトリスの寄贈をいたします。

■ピアトリス維持會に御入會下さるのは社員會員のみでなく若し御援助の御好意をお寄せ頂かれるなら男女に限らず何誰でもよいのです、尚維持會に御入會下さつた方には社費及び會費は頂きませぬ。

■ピアトリス文藝研究會の方へ、今度皆さんのお作を載せるために會員欄と云ふのを設けました。今月はまだ試みで少しの頁數より割きませんでしたが來月からはもつと多くの頁を割きたいと思つてゐます。

■尚私達は同人であるから、會員であるからといつて一寸も區別をいたしません。もし會員の中でもいゝお作をお寄せ下さ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る方がありましたら本欄へ載せることにいたします。

■會員の投稿規定　投稿の種類は、評論、感想、小說、脚本小品、短歌、詩の七種で其中で評論、感想、小說、脚本は各十枚以內(二十字詰二十行原稿紙)のもの、詩及び小品は五枚以內、短歌は二十首迄です。尙紙上に掲載しないものは批評添削の上お返しします。

■本誌定價の改正、ピアトリスは今回定價を改正して一冊二十錢と致しました。がピアトリス文藝研究會員の會費は矢張從前通り一ヶ月二十五錢です。で、只御講讀なさるだけの方々でこれから研究會を止めて單に直接講讀者にならうとお思ひになる方がございましたら其旨御通知をおねがひ申上げます。

■ピアトリス文藝研究會の方でも又は直接講讀者の方でも會費及び誌代が前金切になつた時には前金切の印を捺します。又未納で差上げる時には未納の印を捺しますから其時は速かに會費及び誌代を御送附下さい。

■それから市內御在住の社員及び會員の方の社費及び會費のことですが每月集金人を差上げるのは殆ど會費の三分の一を其費用に宛てなければならないのです。それをもし御都合やお留守のために御支拂が一度ですまないと僅かの會費なんぞは皆費用に消えて仕舞つて、社の經濟では大變困ります。それで此點を御同情下さいまして、皆さんの方で二ヶ月位纒めて月の中ば迄にお送り下されたいと思ひます。でもしお送り下さらない方の處へは中ば過ぎに集金郵便で集金を致します。其一回丈(三錢)は此方の費用で致しますが、二回目からは皆さんの方から費用を頂きますからどうぞ右のこと惡しからずお含み下さいませ、尙每月の談話會及編輯會議にお見えになる時に御持參下されば一番都合がいゝと思ひます。

■來年は收穫のある年だと思ひます。來年は新らしい幸福と確かな收穫とが皆さんにも私たちにももたらされると思ひます私たちは謙遜な心持を一層胸に持つて、足をしつかりと踏みしめるやうにして、動搖しない地步を得てゆきたいと思ひます。それには益々勉强したり考へたり、働いたりしなければなりませんが、どうぞ來年はいい年でありますやうに。そしてピアトリスの益々よくなつて行きますやうに。それでは皆さま御機嫌よくお年をお迎へなさいまし。

新刊紹介

新しき命　野上彌生子著

野上彌生子女史は、心理的な描寫と眞摯な態度と、上品な淸楚な筆致とを以て、今の閨秀作家中の唯一人と目されてゐる人であります『新しき命』『小指』『渦』『二人の小さいヴアガボント』其他六篇、何れを見ても女史の婦人として得易からざる智識と批判とが窺はれます。殊に其の兒童と女中とに對する觀察は新らしい藝術としても家庭生活の眞實を考ふる上からも貴寶な珠玉のやうなものだと思ひます。皆さんの御熱讀をおすゝめ致します。(定價一圓五十錢神田區南神保町十六番地岩波書店)

寄贈雜誌

● スネエク ● 淸音 ● 淑女畫報 ● 女の世界 ● 白山新聞 ● 金泥 ● 新少女 ● 趣味の友

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雜誌規定

□毎月一回一日發行

□定價一冊金貳拾錢（郵稅壹錢五厘）

□前金購讀料三ヶ月分（六拾錢）　六ヶ月分（壹圓拾五錢）

一ヶ年分（貳圓三拾錢）

□廣告料一頁　特（三拾圓）　一等（貳拾圓）　貳等（拾五圓）

三等（拾圓）　半頁（五圓）

□郵券代用は壹錢貳錢に限る（但し一割增）

□編輯、經營、會員申込上の事務は一切ビアトリス社宛のこと

□原稿〆切期日は十日限りとす。

大正五年十一月廿八日印刷納本
大正五年十二月一日發行

東京市牛込區築地町六番地
編輯兼發行人　山田たづ

東京市牛込區市谷谷町九十三番地
印刷人　矢部政吉

東京市牛込區市谷谷町九十三番地
印刷所　サンデー社印刷所
電話番町二七六六番

東京市牛込區築地町六番地
發行所　ビアトリス社

發賣所
——（〆）——
東京堂
東海堂
良明堂
北隆館

新しき命

野上彌生子著

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA